

FRIENDS PROJECT

2011 報告書



□■ 目次 ■□

| | |
|--|----------------|
| 1、塩原研究会とは | ・・・・・・・・ p. 2 |
| 2、フィールドワークについて | ・・・・・・・・ p. 3 |
| 3、FRIENDS PROJECT とは | ・・・・・・・・ p. 4 |
| 4、FRIENDS PROJECT の活動のビジョンと実施体制 | ・・・・・・・・ p. 5 |
| 5、各班の活動報告 | ・・・・・・・・ p. 7 |
| 6、3期、4期活動報告「2011年度 Friends Project を振り返って」 | ・・・・・・・・ p17 |
| 7、指導教員より | ・・・・・・・・ p. 46 |
| 8、編集後記-2012年度に向けて- | ・・・・・・・・ p. 47 |

□■ 塩原研究会とは ■□

塩原良和研究会（以下塩原ゼミ）とは、2008 年度秋学期に開講した慶應義塾大学法学部政治学科、国際社会学を主な研究対象としている研究会です。2011 年度は海外に留学中のゼミ生も含めて 4 年生 18 人、3 年生 14 人で活動しており、卒業論文の研究テーマゼミ生ごとに異なった研究をしていますが、そんな中、32 人共通のトピックとして勉強をしているのが、「多文化共生のあり方」についてです。

塩原ゼミでは、文献講読だけでなく、外国にルーツを持つ方々やその援に携わる方々にインタビューを行ったり、協働実践を企画したりと、肌で人と社会を感じ、学ぶ時間を大切にしています。



□■フィールドワークについて■□

塩原ゼミは大学内で勉強をするだけでなく実際に外国人住民の方々の生活する地域に足を運び、ボランティア活動などを通じて現場の目線から多文化共生について考える「フィールドワーク」を大切にしています。具体的には神奈川県川崎市や鶴見区を拠点とする外国人住民支援団体のご協力を得て、外国人児童、生徒の勉強を補佐する「学習サポート」活動を行っています。教科書や宿題の難しい部分を解説したり、一緒に入試対策をする事などを通じて信頼関係を深めつつ、彼らを取り巻く学習環境や社会的環境について考察を行う事がこの活動の主な目的です。また勉強をするだけでなくレクリエーションや映像制作などの課外活動を協同して企画・実行する事で、人と人がより良く繋がる事ができるコミュニケーションやコミュニティの可能性についても追求します。

■学習教室紹介■

本年度の塩原研究会の学習サポート活動は、開講当初からご協力を頂いている「社会福祉法人青丘社 ふれあい館」に加え、「NPO 法人 ABC ジャパン」のご協力を頂き、計三つの学習教室を中心に行いました。

1、ふれあい館

ふれあい館は川崎市桜本地区にあるコミュニティ施設で、週に2度ほど外国につながる子ども達のための学習教室を開催しています。塩原ゼミは開講当初から学習教室に参加させて頂くなどしてお世話になっており、今までのFRIENDS PROJECTの活動もこの施設を中心にして行われました。今年も前期に三年生が学習教室への参加を通してフィールドワークの基礎を学びました。またゼミの活動とは多少独立していますが、地域の子ども達と一緒に歌や音楽を作る等の「文化プロジェクト」も社会人の方々の協力を頂いて行われています。春には、本館で行われるふれあい館祭りの運営を手伝うこともありました。お祭りでは、生徒の一部も運営に加わり、私達も彼らと協力して手伝いながらイベントを満喫しました。

2、潮田小学校国際教室「つるみーによ」

潮田小学校が外国人国籍を持つ生徒たちを対象として行っている放課後の学習サポートの活動です。ゼミ生は、毎週水曜日の放課後国際教室に通い、宿題の手伝いを中心とした学習サポートを行っています。

小学校の先生が独自の判断で、放課後教室への参加が必要だと判断した子供達に声をかけ、保護者の承諾を取ったうえで参加が決まります。約30人の子供達が参加しており、1年生から6年生まで年齢層は幅広いです。また、国籍別で見るとブラジル(19人)、ペルー(4人)、フィリピン(2人)、中国(2人)、ウルグアイ(1人)と南米にルーツを持つ子供達が多いです。

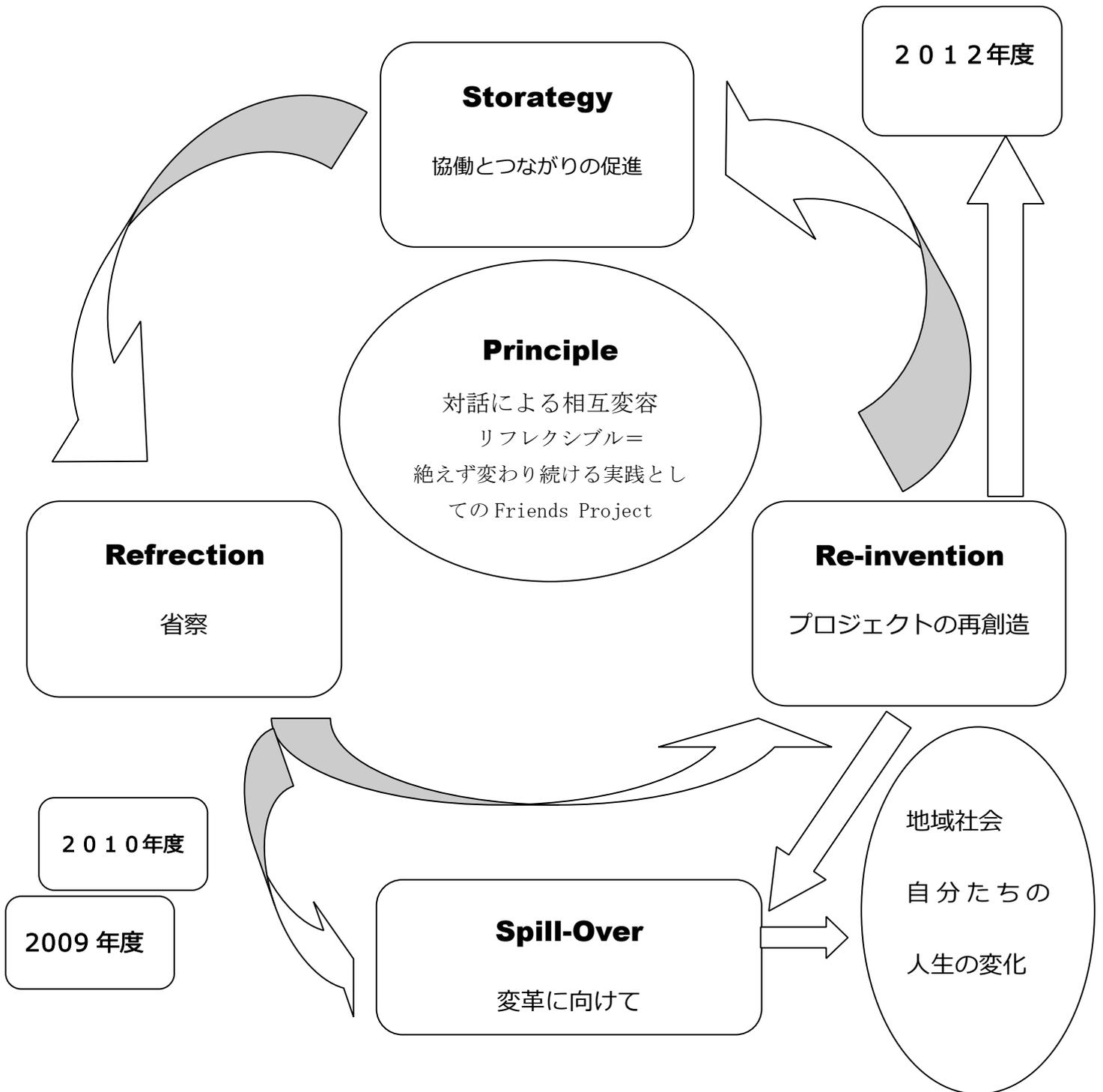
3、鶴見夜教室

鶴見夜教室は、NPO法人ABCジャパンと塩原良和研究会が協力して開いている学習サポート教室です。毎週土曜日、午後5時から午後8時の間、鶴見駅前にある鶴見国際交流ラウンジの教室にて行なっています。現在、中学生も大学生も毎回4~8人ほど集まっており、英語や数学のテスト勉強や高校入試に向けた面接練習をしています。しかし、ただ勉強するのではなく、勉強後には皆でお菓子を食べたりゲームで楽しんでいます。また、時にはレクリエーション企画や、慶應義塾大学のキャンパスツアーを行ない、「先生と生徒」という枠にとらわれず、大学生である私達にできることを模索しながらのびのびと活動しています。

□■ Friends Project とは ■□

2009年に始まった、塩原良和研究会の大学生と外国につながる子どもたちの協働プロジェクトです。今年度は、鶴見国際交流ラウンジ、潮田小学校、ふれあい館における外国につながる子どもたちへの学習サポート、そして、三田の家にまで拠点を広げ活動してきました。Principleを「対話による相互変容」とし、一つの定められた目標を達成することで終わるのではなく、あらゆる場面で対話を重ね、絶えず変わり続ける実践を試みています。

Friends Project のビジョンと実施体制



■Principle：対話による相互変容

外国につながる子どもたちと塩原ゼミの大学生と教員が、それぞれの自己についてより深く考え、お互いの人生について想像する感性を磨き合う。そして、それぞれのやり方で自分の思いを表現する方法と喜びを分かち合う。

□Strategy：協働とつながりの促進

Principleを達成するために、このプロジェクトに関わるすべての人々のあいだに、このプロジェクトが終わったとしても続いていく「協働とつながり」を創り出す。そのために、「鶴見国際交流ラウンジ」「三田の家」を拠点に、それぞれの具体的なGoalを設定してさまざまな実践を行う。

■Reflection：省察

塩原ゼミの大学生と教員が、このプロジェクトの遂行を通じて川崎・鶴見の外国人住民の状況をより深く知り、このプロジェクトのPrincipleやGoalが間違っていないか、常に考え、議論し続ける。

□Re-invention：プロジェクトの再創造

今年度のプロジェクトの成果や課題、関わった人の思いを、来年度のプロジェクトに伝える仕組みづくりをする。

■Spill-over：変革に向けて

ゼミ生をはじめ、このプロジェクトに関わった全員が、それぞれの人生で、それぞれの場所でやるべきこと、無理なくできることを、続けていく鶴見・川崎の地域社会における外国人住民をめぐる状況に、良い方向の変化を起こしていく。

■Project Member■

指導教授

塩原良和

3期

(3期フィールドワーク)

井上翠 小野沙織 松尾幸明 向井貴信 村松康彦 米谷卓

山本杏奈 浅野理衣 池田裕美 小鞠誠人

佐々木一穂 新毛聡一郎 引間美沙子 榎本沙織

奥村奈央 君島龍一 佐藤美織

4期

<3期フィールドワーク、ふれあい館、鶴見夜教室>

清水勇登 金ヒョン Chol 萩原沙織

<潮田小学校>

桑田恵理華 桂竜馬

<三田の家>

山崎紗也加 笠間佐和子 本澤真綾 保里小百合 津谷瑛里

<全体管理>

阿部優衣 金藤達紀 重田竣平 守屋未緒

<協力団体>

社会福祉法人 青丘社 ふれあい館、NPO法人 ABCジャパン

※3期は、外国につながる高校生に焦点を当てたプロジェクトを3期全体で運営。

4期は鶴見夜教室、潮田小学校国際教室、三田の家、3つの活動拠点ごとに担当を決め、担当者中心に話し合いを進めたが、プロジェクトそのものの運営は3期、4期合同で行った。

※全体管理とは、授業や大学内外での塩原ゼミ全体に関わる管理を行った。

□■各班の活動報告■□

- 1、3期（4年）フィールドワーク
- 2、4期（3年）フィールドワーク、鶴見夜教室、ふれあい館
- 3、潮田小学校
- 4、三田の家

■3期フィールドワーク■

□活動内容

ゼミの4年生は前期（5月～7月）に、大学生との交流会と映像ワークショップの開催を通して、子どもたちとの協同実践を行いました。「交流会」では、ゼミ生の引率で慶應義塾大学の日吉キャンパスに子ども達を招き、ダンスサークルやバンドサークルの活動を見学・体験してもらいました。この企画の目的は、子ども達にはまだ馴染みのない「大学」という空間に触れてもらい、大学が単に勉強を行うだけでなく自分の好きな事や可能性を追求できる場所であることを実感してもらう事でした。当日は多少のトラブルもありましたが無事に終わり、子どもたちにもイベントを充分に楽しんでもらう事ができました。

またこの活動を土台として、7月の末には「映像ワークショップ」を開催しました。このイベントでは脚本・撮影・演出などを子ども達と話しあい、5分弱の映像作品を子ども達と一緒に製作しました（編集はゼミ生主体）。最初は戸惑っていた子どもたちも撮影が進むにつれて自分からアイデアなどを出してくれるようになり、ミステリー風の作品やラブストーリー風のドラマなど多種多様な作品が完成しました。この様な活動を通し、自分の考えている事や伝えたい事を表現する楽しさや、他者と協働して一つのものを作り上げる事の大切さを子どもたちに実感してもらえ、事が出来たと思います。

□4年フィールドワーク班の一年

| | |
|----------------------------|--|
| 5月18日 企画会議（@鶴見・ABCジャパン事務所） | ABCジャパンの方々と企画の理念・内容・これからの予定について議論しました。 |
| 6月9日 子どもたちへの「営業」①（@鶴見市街） | 子ども達の集まる場所を訪問し、翌月の「交 |

| | |
|--------------------------------|---|
| | 「交流会」の説明・参加の呼びかけを行いました。 |
| 7月3日 大学生との交流会 (@日吉キャンパス) | サークル活動の見学を通して、大学の雰囲気子ども達に体感してもらいました。 |
| 7月13日 子どもたちへの営業② (@鶴見市街) | 鶴見市街のエスニック料理店を訪問し、ワークショップのチラシを置かせてもらいました。 |
| 7月21日 映像ワークショップ① (@鶴見国際交流ラウンジ) | ラウンジ内でサスペンス映画風の映像作品を協働制作しました。 |
| 7月22日 映像ワークショップ② (@日吉キャンパス) | キャンパス内でラブストーリー風の映像作品を協働制作しました。 |

■3年フィールドワーク ふれあい館&鶴見夜教室■

□活動内容

私たちは、鶴見国際交流ラウンジにて、ABC ジャパン様のご協力の下1年間「外国につながる子供たち」に学習支援に取り組んで参りました。さらに、春学期は川崎駅のふれあい館で小学生の学習支援にも取り組みました。

□3年フィールドワーク班の一年

| 日付 | 内容 |
|-----------------|-------------------------------|
| 4月26日(火) | FWオリエンテーション：夜教室(ABCジャパン) |
| 5月10日(火) | FWオリエンテーション：ふれあい館学習サポート |
| 5月14日(土) | フィールドワーク活動開始 (7月9日まで活動を継続) |
| 6月4日(土) | ふれあい館祭り |
| 7月16日(土) | つるみ夜教室レクリエーション企画 |
| 7月19日(火) | 前期活動報告プレゼン |
| 8月6日、8月20日、9月3日 | 夏季におけるつるみ夜教室運営を3回行う。 |
| 10月1日(土) | 三田キャンパスツアー、「みたをみたい」 |
| 10月8日(土) | つるみ夜教室、後期運営開始 (2月18日まで活動) |
| 11月12日(土) | 映像報告会 |
| 11月23日(水) | 三田祭体験 |
| 12月10日(土) | 外国につながる社会人を招いてのセッション |
| 1月21日(土) | 受験模擬面接 |
| 1月26日(木) | 送別会 |

□感想

<ふれあい館>

春学期中、ゼミ生はふれあい館で小学生の学習支援に取り組みました。何も分からないながらも、ふれあい館の多賀先生のサポートのおかげで、私達は活動することができました。さらに、「ふれあい館」祭りでは、地域の方々と交流することが出来ました。反省点としましては、ふれあい館でのフィールドワークは、活動期間が短かったため、主体的にゼミ生が活動することは出来なかったことです。

<鶴見夜教室>

-生徒との関係の変化-

ゼミ生のほとんどが「外国につながる子どもたち」と接した経験がなく、最初は恐る恐る学習支援に取り組んでおりました。

しかし、前期のレクリエーション企画を境目に大きく雰囲気が変わったのを覚えていま

す。以降、キャンパスツアーなどの企画や、日々の学習支援の回数を重ねるたびに生徒たちが素の表情を私達に見せてくれるようになったと感じます。

-常にあった悩み-

生徒たちと接する中で、常に私達が抱えていた悩みがあります。それは、生徒たちに対する私達の「ポジショナリティ」です。私達は、生徒たちに対して、夜教室においてどのような立場として接するべきなのかについて問い続けました。

私たちは、学習支援として夜教室の活動に参加し始めました。しかし、プロの教師でない以上、私たちに出来ることはただの「先生」ではないはずだ、と気づきました。一方、彼らと「友達」として親しくなりすぎても、本来の学習支援に支障をきたしてしまうという懸念がありました。

実際、彼らと「仲が良く」なっていく中で、私達の「ポジショナリティ」の曖昧さをずっと感じていました。

-常に続けた対話-

私達は現状のゼミ活動に対して『これでいいのか?』と、常に問いかけ、「ポジショナリティ」に関して、ゼミ内で対話を繰り返しました。

「学習支援」の名目の元、本来であれば、支援者対非支援者の関係性で相互間に生じる壁を打ち破ろうと挑戦しました。そして、想像力を働かせ続けた結果として私たちがたどり着いた立場は「先生」でも「友達」でもない「中間の存在／居場所」でした。

自らの立場の曖昧さを認識した上で、「この立場だからできること、創れる居場所」を探すことにしたのです。

-今後に向けて-

2011年度FPプロジェクトは終わりました。しかし、もちろん私達と彼らが創り上げた関係はここで途絶えるようなものではありません。また、FPそのものも続いていきます。ABCジャパンの皆様、塩原先生、先代の先輩方など多くの方々からのご支援があったからこそ生まれたこのご縁、つながりを大事にしていきたいです。

私達の活動には、多くの反省点が残りました。活動のビジョンの不明確さ、ゼミ内及びABCジャパンの方々との情報共有の甘さなどが挙げられます。そうした点を次の期のゼミ生と対話をしながら、改善し、FPに活かします。

これからも、「対話」を軸に、今のつながりを持続けると同時に、そこから新たなつながりが生まれるような活動を続けていきたいと思えます。

■潮田小学校国際教室■

□活動紹介

潮田小学校国際教室では、ゼミ生がそれぞれ担当の生徒の面倒を見る個人対個人の関係作りを行ってきました。そのため、具体的なイベントや企画というものは行わず、子供達の宿題の学習サポートに徹する形で活動を行いました。

前半の1時間は3年生が低学年の子供達の学習サポートを中心に行いました。そして、後半の1時間は3・4年生で高学年の子供達の学習サポートを見ました。

ゼミ生の他にも、主婦のボランティアの方や大学院生の方など、さまざまな人達がサポート側に関わっていました。

日本語の習得レベルは個人差があるものの、日本語に対する苦手意識を少しずつなくしたり、国際教室という普段使っている教室とは別の居場所を提供したりできることで、より一層勉強に対するモチベーションを高める場所としての役割は大きいです。

ゼミ生主体ではなく、他のサポートの方々との共同作業であったことで、「信頼関係の構築」が私達のテーマでした。継続的に足を運ぶことで、少しずつ子供達に自分達のことを覚えてもらえ、より身近な存在として感じてもらえることで、信頼関係が少しずつ築き上げられたのではないかと感じます。

■三田の家■

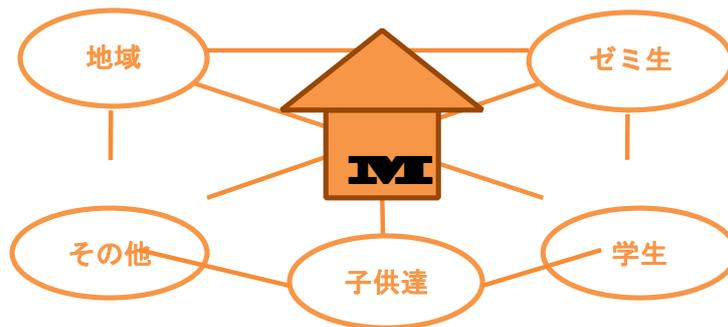
□三田の家のコンセプト

「三田の家」という場を介し、“対話の場”を提供

- 「つなぐ」：三田の家という特徴的な学びの場を生かし、ゼミ生、地域、学生、外国につながる子供たち等、様々な人々が対話する場を提供し、対話を実践する。
- 主体となるゼミ生と三田の家を訪れた人のみがつながるのではなく、地域と外国につながる子供たちがつながれるような場所作りを目指す。

□三田の家系のポジション

- 三田の家係は「リーダー」や「ファシリテーター」として企画を先導するのではなく、各企画のファシリテーターや三田の家利用者が動きやすいようサポートする。



□活動紹介

□三田の家の一年

| | |
|--------|-------------------|
| 10月11日 | 1、映像ワークショップ① |
| 10月18日 | 1、映像ワークショップ②。 |
| 10月25日 | 2、ワールドカフェ |
| 11月1日 | 3、オープンゼミ |
| 11月8日 | 4、「CROSS ROAD」上映会 |
| 11月15日 | 5、演劇ワークショップ |

| | |
|--------|---------------|
| 11月29日 | 6、映画鑑賞ワークショップ |
| 12月6日 | 7、対話型鑑賞会 |
| 12月13日 | 8、移動系イベント |
| 12月17日 | 8、ガレッジセール |
| 12月20日 | 9、多文化セッション |

□詳細

1. 映像ワークショップ：3・4期のみならず、5期以降も含めた「ゼミ内」の縦のつながり

- 目的：ゼミの撮影機材及び使い方の引き継ぎをし、実際に機材を使って、後輩へ向けて機材の使い方を紹介したVTRを作る。
- ファシリテーター：山崎紗也加
ただ引き継ぎをするだけでなく、先輩方の活動を知り、実際に3・4期と一緒に取り組むことで、よりゼミ内のつながりを意識できた。現役に留まらず、後輩へもつながる試みになった。

2. ワールドカフェ：これからの三田の家について 方針・企画の決定

- 目的：ワールドカフェという手法を用いて、三田の家という空間を使いつつ、これからの三田の家について話し合い、方針、企画等のアイデアを練る。
- ファシリテーター：山崎紗也加
BGM やスープ等を用意したことによってリラックスし、意見が出やすくなった。より主体的に行えた。今後の活動のベースに。

3. オープンゼミ：知識の有無に限らない、自由な対話

- 目的：「物乞いの話」を通じて、社会学に触れてもらおうと共に、知識の有無問わずみんなが参加できる対話へ
- ファシリテーター：重田峻平
予想外に大勢の2年生が参加したが、積極的に意見が出たこともあり、主体的で充実した内容だった。今後は予想外の発見・気づきがある対話を目指す。

4. 「CROSS ROAD」上映会：ゼミ生の課外活動報告

- 目的：ゼミ内の活動ばかりでなく、各々のゼミ外での活動を知り、そこから得た“気づき”をゼミ全体で共有する。
- ファシリテーター：重田峻平
ゼミ全体で共有したことや、先生の鋭い指摘により、新たな発見や気づきがあった。「過去を語る」ということについて、深く考えるきっかけに。

5. 演劇ワークショップ：弁護士・小林善亮先生と対談 憲法ミュージカルの実践

- 目的：世の中の認知されづらい問題について演劇を通して考える。また、実際に活動している方のお話を聞く。
- ファシリテーター：井上翠
「個人の尊重」という複雑な問題だったが、実際に体を使い、表現する演劇は気づきの「きっかけ」になりうると感じた。実践されている方の「生の声」は、普通のゼミ活動では得られない新たな発見につながると思った。

6. 映画鑑賞ワークショップ：「スラムドックミリオネア」から見る社会学

- 目的：映像を通して、先進国と第三世界の関係等を含めた社会を見つめ直す。
- ファシリテーター：金藤達起、桑田恵理華
あえて批判的に映画鑑賞することで、何気ないシーンからも先進国優位という価値観が見受けられた。無意識の内にも、偏見の要素はあるのだと思った。

7. 対話型鑑賞会：平野智紀さんと対談 対話型鑑賞の実践

- 目的：対話型鑑賞会というフリートーク型の芸術鑑賞方法を通し、対話を目指す。
- ファシリテーター：山崎紗也加
対話型鑑賞は、意見を交換し合うからこそその新しい解釈や視点が生まれ、とても興味深い鑑賞法だった。飛び入りのゲストによって議論も白熱し、いつものゼミ内の議論とはまた違う、充実したものとなった。

8. 移動系イベント・ガレッジセール：地域（三田商店街）の人々との交流

- 目的：ガレッジセールとその告知活動をきっかけに三田に集う人々との交流を図る。
- ファシリテーター：萩原沙織、津谷瑛里、佐藤麻里絵、奥村奈央、本澤真綾
三田の商店街の人々と交流することができた。しかし一方で、怪しまれてしまいなかなかうまく話しかけられず、「対話」の不可能性と人の優しさに気づかされた。

9. 多文化セッション：ナイジェリアと日本の文化（落語）

- 目的：ゲストの方のお話や落語を通じて、楽しく多文化共生について考える。
- ファシリテーター：フェリー、君島龍一
ナイジェリアの話は興味深く、落語も面白かった。シンプルな異文化交流だからこ

そストレートに文化の違いが感じられ、改めて多文化共生について考えさせられた。

10. つながる本棚「つなぼん」：三田の家をつなぐ本棚(実地予定企画)

- 目的：三田の家に関わる人々の興味分野を知り、自分の興味分野を深め、広げる。三田の家での曜日を越えた交流を図る。いずれは地域交流へ。
- 企画者：三田の家係(山崎紗也加)
 - ◇ 設置場所：三田の家リビングの本棚
 - ◇ 本の集め方：各曜日マスターから関係者に呼びかけていただき、各曜日3～4冊を集め合計25～30冊程度集める。
 - ◇ つなぼん利用ルール： 1. 物々交換が基本 2. アツい本を置く 3. 伝える 4. 漫画はなし！ 5. 返すものは返す

□三田の家班まとめ

- 当初の目標である「ゼミ生がパイプ役となり両者をつなぐ」ことに関しては、まだまだ達成されたとはいえない状況であったが、一方でゼミ生と三田の家が集う様々な人々とのつながりを得ることができた。
- 「つなぐ」、「つながる」、「対話の場の提供・実践」を目標に掲げ、各企画の狙いを定めつつ活動をサポート、報告書の作成と振り返り、という一連の流れの中で、印象的な出来事の多くは“予想外の対話”から生じていた。
- 「三田の家」という対等な関係の下での対話の場を提供するにあたり、ゼミ生が「ホスト的存在」であることは否めず、意識しなくてはいけない。しかし一方で、「対話」を目標としつつも、「話さなくてもよい」という圧力のない空間は非常に心地良く、また予想外の対話も生まれた。いかにそのような自由度の高い空間作りをするかが鍵なのだろう。
- 今年度の活動で様々なつながりを「広げて」きたが、“継続性”という点から対話を考えると、まだまだ始まりにすぎない。来年度へは、企画運営の引継ぎではなく、今年度からの「つながりの蓄積」に努めたい。

□■ 3期、4期活動報告

「2011年度 FRIENDS PROJECT を振り返って」 ■□

2011年度末、塩原ゼミの3期、4期の全員が各々の視点から「2011年度 Friends Project を振り返って」というテーマで思い思いの文体で綴った報告書です。

全体の活動報告とは異なった個人の視点からの FRIENDS PROJECT を感じていただければ幸いです。

「出会いが“つながり”に変わる場所」

4年 担当：三田の家

氏名：引間 美沙子

2011年度の「FRIENDS PROJECT」は昨年度に比べてより一層、1つ1つのワークショップの内容が多岐に渡り、参加した者に毎回「新たな視点」をもたらすものだったと思う。なぜなら今年度のワークショップは、様々な興味・問題意識を持つファシリテーターを中心に実施され、参加者同士の対話を促すものが多かったからだ。

しかし今年度のFPは、はじめからスムーズに進んだわけではない。昨年のFPは1年の流れの中で、映像班・活字班・対話班として班が学年関係なく構成され、各フィールドで活動していた。そのため3年生は、自然とフィールド先で先輩の姿からフィールドワークにおける振る舞いや考え方などを感じ取って学び、前年度のFPの反省を引き継ぐことが出来ていたと思う。ところが、今年の前期は学年やフィールドごとに活動が分かれてしまい、互いに「今、他のフィールドでは何をやっているのか」ということに疎くなっていたと思う。このゼミ生同士が情報を共有できていない状態を打開したのが、夏合宿に行われたワークショップである。「よく考えてから実行する」傾向の4期生に対し、「とりあえずやってみて考える」傾向の3期生。共に実践を振り返ることで互いの長所・短所を知り、後期のFPへのゼミ生の参加姿勢・情報共有の方法を改善することに繋がった。

それからの後期の三田の家でワークショップは実に盛り沢山であった。まず、撮影機材の引き継ぎや企画を練るワールドカフェは、ゼミ生の一体感を生み、三田の家が「対話」をしやすい空間であると改めて認識する機会になったと思う。つづく重田君の映像作品や演劇、映画やアートなどを鑑賞するワークショップでは、同じ作品を見ても人によって感じ方が多種多様であること、その感じた思いを皆で共有し合うと新たな視点を得られることを学んだ。さらに、ミュージカルや映画、アートのように親しみやすい芸術作品を用いることで、世の中で見過ごされがちな問題を人々に認識させることが出来るという可能性を実感することが出来た。また、昨年度のフリートークと対談 Night はゲストスピーカーを招くという点で似ているが、フリートークが多文化共生というテーマに関連したお話を聞くものであったのに対し、対談 Night はあるテーマに対する問題意識を人々に喚起させる「新しい切り口」を提供してくれることが多かったと思う。同じ物事を見て触れて、異なる感想が次々と出てくる三田の家で過ごす時間は刺激的だった。そしてガレージセールは、当初予定していたように外国につながる中高生の参加は残念ながらなかったが、三田の商店街や地域住民の方々と交流するきっかけにはなった。1人1人と深く関わるまでの時間はなかったかもしれないが、三田の家があったからこそその「出会い」だったと思う。

以上のように、三田の家には多くの「出会い」の可能性がある。来年度のFPではこの開かれた空間をさらに生かし、ゼミ生と地域住民、ゼミ生と外国につながる子どもたちだけに留まらない、新たな「つながり」が生まれると良い。

4年 担当：三田の家

氏名： 奥村奈央

今年の反省は外国につながる小中高生たちと継続した関係を築けなかったこと。改めて、人との「つながり」や「信頼関係」を築くことのむずかしさを実感した一年であった。今年度は潮田小学校への学習サポート(一回のみ)、日吉キャンパスツアー、映像作品上映会、主催イベントとしてのガレージセールイベントに参加した。

私の班が企画したイベント、ガレージセール。もともと高校生たちと一緒にやろうと思っていた企画だったが、高校生は一人も来なかった。残念すぎる。人に頼るばかりで自分からあまり行動を起こさなかったツケだ。当たり前すぎることだが、自分から動かなければ、人との関係も作れないし、信用もされない。私はいまだに塩原先生が築いてきた関係や塩原先生の持つ「ネームバリュー」に甘えていたのだろう。

今年度の春学期には、昨年ゼミ生が築いた信頼関係が生きてきたことで、神奈川交流財団との協働企画として映像ワークショップが行われることになった。外部の団体と協働して企画をすることは私たちにとって初めての試みであり、年少者である外国につながる子どもたちを預かる責任と真剣に向き合うことになった。当日はタイムスケジュールの面で甘さがあったが、参加者全員よく笑っていた。外国につながる高校生たちと一緒にいる時間が長かったため、普段の生活のことや将来の夢についての話を聞けたりと、私にとってはとても楽しいひと時であった。

塩原先生が様々なチャンスを持ってきてくれた昨年度までとは違い、今年度からはより一層ゼミ生一人ひとりと外国につながる子どもたちとの関わり方が濃厚になってきた。その分ゼミ生の向き合い方が問われるようになってきたということでもある。

今回のガレージセール企画ではまだまだ自分が子どもたちや外部の人たち、あるいはゼミ生(!)からも信頼されていないのだと思い知った。子どもたちをガレージセール企画に誘う際にも人に伝言を依頼することが多く、私自身が直接子どもたちと向き合って説明する機会を設けなかった。こうした自分のやり方をよくないと思う一方で、思っていたよりも自分と外国につながる高校生たちとの接点が少ないということにも気づいた。どこに行けば彼らに会えるのかもわからない。だからこそ、高校生たちと会う機会のある時はしっかりとつながりを保っていくことがとても大事だった。「ゼミの活動として」ではなく、「お兄さん・お姉さん」のような気軽な存在として、外国につながる子どもたちと関わっていきたくて改めて思う。次年度は初心に立ち返り、「顔の見える関係」を大切に、信頼に足る人間へと成長することを私自身の目標にしたい。

幸いにも、先生から卒業論文の研究成果をゼミの活動で試してみたらどうかとのお誘いをいただいた。どんな内容かはまだ秘密にしておきたいが、私自身のゼミでの学びの成果として今度こそきちんと形にして残したい。

私のこの一年間の FRIENDS PROJECT としての活動は、潮田小での学習支援と映像ワークショップの二つに大きく分けられる。

潮田小学校には去年から関わり続けていたが、今年は一年間を通してよりコンスタントに学習支援に参加したため生徒たちとの距離も近づいた。また、小学校低学年の一年間の成長には目を見張るものがあり、去年からの子どもたちの成長には何度も驚かされた。一年の頃は平仮名も覚束なかった子が自分もかつて読んだ覚えのある作品を二年になって音読してみせたり、足し算に苦労していた子が九九に励んでいる様子を見守っていると、まるで親のような気持ちで微笑ましく感じ、毎週子どもたちに会えるのが楽しみでならなかった。

潮田小の放課後支援教室で、私たちゼミ生は同じボランティアの中でも子どもたちにとっては「教師」というより「お姉さん」「先輩」、もっと言ってしまえば「友だち」に近いポジションにいられたのではないかと感じている。回を重ねて子どもたちと会うことが増えるにつれ、子どもたちが心を開いてくれるのが分かり、また私の方も一人一人の個性を見つけたり、個人として向き合うことが多くなっていった。時には漫画やアニメの話をし、遠足のことや友だちとの思い出、家での話を聞いたりしていると、年がずっと離れているにも関わらず距離はとて近く感じられた。潮田小の学習教室は勉強そのものを教える場というよりはもちろんその必要がある子には然るべき支援もされているが、勉強する「場」をつくるということの方が本質であり、私たちの役割はその「場」を支えることであった。そういう点で、教師や他のボランティアよりも彼らに近い存在としての私たち大学生ボランティアが学習支援教室に参加していた意味は小さくなかったのではないかと思っている。

続いて映像ワークショップであるが、こちらに関しては鶴見の高校生たちを対象に、ワークショップをはじめ新しい企画をいくつか実践できたのが面白かった。派生イベントとして文化祭を記録しに行ったり、進学説明会に参加させてもらったりしたことも印象深かった。

高校生たちとは年も近く、また去年から引き続いて活動している高校生も何人かいたため今年はより彼らと仲良くなれたことを実感した。「ゼミ生」と「高校生」という枠を外しても仲良くなれる可能性を感じたし、それだけに私たちが卒業することでこの関係性がなくなってしまうことになれば残念だとも思う。

映像ワークショップを通して高校生たちとはキャンパスツアーやサークル体験、寸劇制作などを行ったが、例えばただキャンパスツアーを行うのではなく、映像を通すことで互いの意見を出し合ったり、高校生たちがより能動的に関わる事ができた。ただ高校生と中学生合同で行なった映像上映会企画については、高校生と中学生の間に若干の温度差を感じてしまい、ゼミ生の思惑を少し押し付けてしまったかと反省ものこっている。

潮田小の小学生と鶴見の高校生、どちらのフィールドにおいても、参加してくれている人たちと私との距離が近くなり、「友だちとして」仲良くなれたというのがこの一年を振り返った素直な感想である。しかしこれは「仲良くなろう」「友だちになろう」と努力した訳では全くなく、ごく自然な流れの結果であった。であれば、私は意図せずしてこの「FRIENDS PROJECT」の本質に近づいていたのだろうか。「ゼミ生」と「外国につながる子どもたち」という関係は、私が卒業して、現役の「ゼミ生」というアイデンティティを手放した時になくなってしまうものかもしれない。けれど「友だち」の関係は簡単には終わらない。そんな「友だち」の関係づくりこそが、私たちが FRIENDS PROJECT で目指していた、あるいは求めていたものなのかもしれないと、いま振り返ってみて実感している。

「 」

4年 担当：4年FW・三田の家

氏名： 佐々木一穂

本年度のフレンズプロジェクトは、個人的には昨年と比較するとよりコミュニケーションの色が濃い実践だった。昨年度は鶴見朝教室や潮田小での学習支援活動が主だった自分にとって、今年度の4年FW活動での映像制作や三田の家でのイベント企画は、学習指導のように教える側・教えられる側という分断色が薄く、より実践的なコミュニケーションの可能性について考えるきっかけになったと思う。

4年FWでの映像制作実践では、映像のテーマから配役、構図などを一緒に話し合っ決定して撮影に臨んだ。最初はやはりお互いさぐりさぐり感は否めず、進行や関係性が若干きこなかった印象はあるが、時間がたつにつれて緊張がほぐれ、全員主体的に参加するような雰囲気が自然と出来た。演じる時に一緒に恥ずかしがったり、自分の半端な演技を見て笑い合ったり、不自然な演技にツッコミを入れ合ったりとする中で、外国に繋がる子である事や、自分が企画者側・ホストである事など、細かい属性を意識する事は無かったと記憶している。最初にどうやってコミュニケーション取るかとか、企画主催者ホストとしてどうすべきか、年長者としてどうすべきか、などいろいろ考えを巡らせたけど結局始まってみれば皆笑顔で楽しんでおり、単純に仲良くなれたと思う。今振り返ってみるとそんな思い出ばかりであり、ディスコミュニケーションや壁を感じた印象は無かった。コミュニケーションに「楽しさ」がある事で、各々のポジションの違いが限りなく見えづらくなる事に気付かされた体験であった。

また後期の三田の家の実践では、ガレージセールやその集客を目的とした営業活動を三田の家の人々に行った。三田の街で初対面の人間にガレージセールの告知・それを通じて仲良くなり一緒に写真を撮る、というある種不審感を与えかねない試みだったが、当然拒否感を示す人もいた反面、その物珍しさがウケたのか快諾してくれる人々もいた。普段はあまりない、街かどで仲良くなり写真を撮るという物珍しさが、ある種の「面白さ・楽しさ」を感じさせ、快諾してくれたのではないかと思う。(勧誘者が慶応大生という、ある程度身元がはっきりしている事も手伝ったとは思いますが・・)。

このような活動を通じて、「楽しむ」という事が異文化間にある人々を結び付けるインセンティブとして大切な事は間違いないと感じた。しかし一見一緒に楽しめているように見えても、相手がどう思っているかはわからない。その点についてのフィードバックが今年度の活動は弱かった気がする。また「楽しかった」というポジティブな印象が先行しすぎれば、我々が自覚しないが実際には存在する対話者間のギャップを見過ごす危険性がある事も見過ごしてはいけないだろう。

この点を考慮して、翌年度は活動のフィードバックを我々大学生だけではなく、こどもたちも巻き込んでともに行えるような活動を行うのも面白いのではないだろうか。

「三田の家と地域交流」

4年 担当：みたのいえ班（ガレッジセール）

氏名：佐藤 麻里絵

私が以前参加したのは2009年度のフレンズプロジェクト（以下F P）であるが、今年のF Pはそれと比較して非常に間口の広い活動であった。“三田の家”はその最たる例だろう。社会学という括りによって一応は繋がっているものの、ありとあらゆる企画がごちゃ混ぜで週替わりで開催された。三田の家という自由な空間を利用して、ゼミ生だけでなく外部の方も加わり様々な分野のワークショップ、そして活発な意見交換が行われたことは来年以降のフレンズプロジェクトの可能性を大きく広げたのではないかと思う。

さて、筆者がファシリテーターとして参加したガレッジセールについてここでは報告させていただく。“三田の家”企画の一つであったガレッジセールイベントは、当初から順風満帆とは言い難かった。週末の三田に客が集まるのか、フィールドワークで知り合いになった中高生達は参加してくれるのか、というかモノは集まるのか、費用は賄えるのか、……。構想段階では妄想止まるどころの無かったガレッジセール企画も、いざ具体化する段になると現実的で当たり前な問題と向き合わざるを得ず、冷静になると同時に不安に苛まれた。

そんなこんなで“取り敢えずやるだけやってみよう”と開催したガレッジセールであったが、ふたを開けてみればそんなに悪くなかったと思う。確かに親睦を深めようとした中高生は来なかった。そこは反省点だ。しかし当初の目的のひとつであった“地域の人との交流”に関してはなかなか収穫があったのではないか。「スーパーに買い物に行ったついでに……」、「図書館でチラシを見たから」、「いつも何やってるのかと思って」、「向かいに住んでるので」、と多くはないもののコンスタントに地域の方々が足を運んでくれた。地域の方々にとって謎だったかもしれない三田の家が、この日をきっかけに少しは身近なものになったと信じたい。来年以降のF Pが何を目指し、何を行うのかはまだ分からない。しかしこのイベントで得られた“つながり”が、そのF Pにいつか何らかの形で好影響を与えることが出来れば嬉しい限りである。

「これから先の塩原ゼミのみんなへ」

4年 担当：4年FW班

氏名： 山本 杏奈

2010年前期のFriends Projectは新しく知ることばかりで、鶴見での学習支援も手探りのまま、なんとか形にできるように必死だった。後期は、もう少しで卒業してしまう2期の先輩から、少しでも多くのことを吸収しようと夢中になった。

そして2011年のFPは、4期の後輩が初めて行く鶴見の学習サポート教室の引率(!?)から始まった。そこで話は思わぬ展開に。去年一緒に勉強していた中学生が、それぞれ高校生になったので、彼らと何か面白いことをやろう。しかも、かながわ国際交流財団(KIF)から予算が出るかもしれないというのだ。私たち塩原ゼミの活動が、少しずつでも信頼と期待を構築しつつあることが、うれしくて誇らしくて、私は二つ返事ではい！と言った。ただ、予算をもらうということは、“責任”という意味において今までとは異なる。臨機応変、行き当たりばったり楽しい企画というわけにはいかない。企画書を作成したり、KIFまで足を運び打ち合わせしたり、作戦会議を重ねたりして“次世代リーダー育成プログラム”の予算の一部を使わせていただくことになった。本来なら当日彼らと会い、直接話をして、どんなことに興味があって何をやってみたいのか聞いてみたかった。その過程で、外国につながる高校生と私たちゼミ生が一緒になった時に、自然と何かが生み出されたら、それが理想的だと思った。しかし“次世代リーダー育成”という目的に則し、ある程度費用や期待される結果など、具体的な企画案を提示する必要もある。その兼ね合いが今までとは勝手が違い難しかったが、第一回はキャンパスツアーを、第二回は映像ワークショップをなんとか実現できた。

また、時期を同じくして、横浜の翠嵐高校定時制部の文化祭の記録映像を撮ってほしいという依頼が来た。去年あーでもないこーでもないと、映像制作に挑んでいた私たち映像班の出番である。私は文化祭当日の生徒たちの活動の様子をカメラに収めながら、フィリピンや中国、ブラジル出身の高校生たちとの、“いまふう”な会話を楽しんだ。最終日、「じゃあそろそろ私たちは帰ります」と言うと、今まで一番おしゃべりだった女の子が「別にさ、帰ってもいいけど、もうちょっといたっていいんだよ」と言いながらうつむいた。それからは、帰り支度をする私たちと最後まで目を合わせてくれなかった。翠嵐高校では、あくまでも活動を記録に残すことだけが目的だった。しかし、私たちは確かに、ただのカメラマンではないちょっと違う何かを、高校生からもらったし、高校生たちにも残してきたのだと思う。

4年前の今ごろ、大学入学を目前に胸を躍らせ、2年前の今ごろは塩原ゼミに入れるかな、入りたいな…とわくわくしていた。そして、2か月後に卒業を迎えた今、ある人から、塩原ゼミの一番の特徴ってなんですかと質問された。2年間のFPを振り返って改めて思うのは、私たちのFPというのは“続いていく活動”だということだ。一般的な大学での研究や勉強と決定的に違うのは、私たちが無事卒論を提出しても、卒業して社会人になっても、FPで出会った中学生や高校生とのつながりが終わるわけではないという点ではないだろうか。それは、私たちに多くのことを教えてくれる教科書となるものが、文献でもデータでも先行研究でもなく、MとかYとかKという、一人一人の個人だからだ。学習教室や映像ワークショップ、文化祭撮影など、きっかけや目的は何であれ、出会い、ほんの少しでもお互いの人生や価値観や感情に影響を与えたとすれば、彼・彼女らとのつながりは、2か月後の3月23日に終わると言えるはずがない。そのつながりは必ずしも目に見えるものではないかもしれないが、これからも続いていくものなのだと思う。続いてほしい。

また、個人と個人のつながりだけではなく、“塩原ゼミの活動”自体も、終わってはいけない。たとえば去年、塩原ゼミが始めた鶴見夜教室は、世代が変わっても、そこに中学生が勉強をしに来る限り、塩原ゼミは教室の運営を続ける。1、2期生が時間をかけて築いたつながりを3期生に引き継いでくれたように、3期は4期に、4期は5期にと次の世代にそのつながりを引き継いでいく責任が私たちにはある。その点で、個人的には、今年4期生と一緒に活動する機会を十分に持てなかったという、後悔と反省が深く残っている。だからこそ、この場を借りて、これから先の塩原ゼミを担うみんなに伝えたい。FPという活動は、個人と個人という横のつながりにおいても、学年を超えた縦のつながりにおいても、続いていく、いや続けなくてはならないものだと私は思う。

「過剰な『意味づけ』の排除」

4年 担当：前期FW

氏名： 小鞠 誠人

個人的には、今年のフィールドワークには反省する点が多かった。ミーティングの都合がつかなかったり、個人的な用事を優先するなどしてしまったためイベントは当日になっての参加が多く、活動の理念や運営のプロセスを考える様な主体的な取り組みはあまり出来ていなかった様に思う。そうした反省はあるものの、資料の作成や営業活動（子どもたちへの呼びかけ）などの準備作業は出来るだけ行うようにしたので、一定の役割は果たせたかと思う。

4年生の活動の中心となった前期の活動、すなわち子ども達と大学生の交流会と映像ワークショップでは、過剰な「意味づけ」を排して楽しく子ども達とふれあう事ができたと思う。昨年の自分の活動の中心となった「自分すごろく」作りでも子ども達とふれあう事は出来たものの、一昨年の先輩達が作成した「自分MAP」に忠実であろうとしたために「過去を振り返りながら未来の自分を描こう」という様なコンセプトにこだわり、いささか押しつけのように子ども達を参加させてしまっていた感があった。活動内容が全く異なるため昨年と今年の活動を一概に比較する事は出来ないが、そういった点では今年は「一緒に一つの活動に参加し、映像作品を作り上げる」という様な対等な関係が前提におかれていたため、昨年の様な違和感を受ける事は少なかった。もちろんただ楽しむだけでは活動が希薄なものになってしまうため活動自体を「意味づけ」する昨年の様なコンセプトも重要ではあるが、それを今年の映像制作の様な表現活動に求めた場合には作品をそのコンセプトに近付けるための「作為」が多かれ少なかれ入ってしまいがちになる。その様な点を考慮すると映像制作の様な表現活動にコンセプトに近づくための「意味づけ」を行うよりは、前期のイベントの様に子ども達とのふれあいや楽しさを分かち合う事を重視する方がより良い様に感じた。もしもコンセプトを重視するならば無理に表現活動に結び付けるよりも、三年生が夜教室の外国人セッションを実施した様な形で「メッセージ」として伝えた方が直接的で自然だろう。

当初はふれあい館を主なフィールドとして始まった FRIENDS PROJECT も各地にフィールドが広まり、活動はますます多様化するようになった。運営の方法や反省などは話し合いや報告書でしっかりと引き継ぎつつ、決められた形にこだわらずに新年度ごとに理念やコンセプトを話し合ったり、あるいはそれらにこだわらない形で子ども達とのふれあいを実現するための関係作りを志向する事を選ぶなどして、絶えず活動の在り方を更新してゆく事がゼミ生の学びにとって、またゼミ生と出会う事になる子どもたちにとって小さくない意味を持つ事になるのではないかと私は考える。

本年度のフレンズプロジェクトの中で私が主として活動してきたのは水曜午後に行われた潮田小学校での国際教室である。この活動は昨年度まではゼミのフィールドワークとして行われてきたが、今年度はゼミの活動としてではなく有志メンバーで行っていくものと年度の始めに先生から説明があったが、1年間の活動を終えた今私にとってフレンズプロジェクトというもののなかで欠かせない存在である。潮田小学校へ通ったメンバーにとっては潮田の国際教室もまぎれなくフレンズプロジェクトの1つなのではないだろうか。

私は4年であるが、昨年度潮田に足を運んだことはなかったため、4月に初めて潮田の国際教室に赴いた。子どもたちは元気いっぱい！先生の話を聞かない子、国際教室に行くのを渋る子、まじめに宿題を解く子、嫌々プリントに向かう子。「子どもたち」といっても様々で、個性豊かであった。

1つの教室にほぼ毎週通ったのは初めての経験。日を重ねる毎に、潮田に行くとき私のことを待っていてくれる子どもたちもいて、1度休んだりすると翌週「どうして休んだの？待ってたのに」と責められた。うれしい言葉だったが、「休んでもいいや」とどこかで思っていた自分に反省もした。子どもたちにとって私は毎週来てくれる先生という存在であって、だからこそ一緒にいて安心できる・時には信頼もできる存在になりうるのだと思う。潮田の国際教室の先生はほぼ毎週固定している。時に新しいメンバーが入るが主に同じメンバーで運営されるため、教室の雰囲気は毎週同じで、落ち着いている。昨年度まで参加していた鶴見の朝教室では、多くのボランティアたちが入れ替わりでやってきていた。もちろん毎回やってくるボランティアさんもいたが、その入れ替わりの激しさで教室の雰囲気は毎回変わっていたように思うし、子どもたちにとっても多くの先生が毎回入れ替わってしまうような状況では落ち着いて、安心して勉強することができないのではないかと思う。そう考えてみると潮田の国際教室は良い環境で勉強できる場であり、子どもたちとの距離が近いように感じるのも納得である。多くのボランティアの人たちに国際教室に来てもらいたいという思いもあるが、ある程度の先生たちが毎週やってくる安心感をつくることはこのような教室を運営していくにあたり大切なことなのかもしれない。

子どもたちは無邪気がかわいく、生き生きと小学校生活を送る彼らを見ているとそこに「外国につながる」ということで負う苦労や悩みなどは彼ら以外の生徒たちと比べてもないように思ってしまう。しかし、子どもたちと机を並べて近い距離で勉強していると、やはりそれぞれの課題というものはあるということを知った。中でも印象的だったのは、小学5年生の女の子。とても真面目で丁寧に勉強をするその子と漢字の勉強をしていた時、その子は5年生の漢字はすらすらと読み書きすることができたが、ずっと前に習っているはずの小学校低学年の漢字が出てくると、「わからない・・・」となってしまっていた。「わたし漢字はできないから」と口ごもる彼女は小学校の初めで習うような漢字を日本で勉強していないようだ。私はここで彼らの学習の1つの壁を見たように感じた。できないことへのコンプレックスは自信の無さにつながってしまう。「国際教室に来ている子」ということで一括りにすることはできず、それぞれの来日状況や学習状況によってもっと個別に対応してあげることが求められているのかもしれない。1年間の活動ではできなかったことへの反省も残った。子どもたちのそのような隠れた苦手分野や自信のない部分といったところに気が付くことができるのはきっとこのような国際教室で子どもたちと近い距離で寄り添うことができるからこそであると思うし、時には親や学校の先生という存在よりも気が付いてあげることができるのかもしれない。私は来年度から潮田に通うことはできないが、ぜひ来年度の潮田メンバーに思いを引き継ぎ、心より添わせて楽しく子どもたちと勉強してもらえればと願う。

4年 担当：4年FW班

氏名： 松尾 幸明

僕にとっては切実な問題なのだが、どうすればリラックスできるだろうかということを一年間考え続けてきた。それはFPの実践だけにとどまらない。日常のあらゆる場面で、肩の力を抜こうと努め、意識的に行動してきた。リラックスすることの重要性、僕はそのことをFPの活動を通して学んだ。

三年生のときは初めてのことばかりだったから、とにかく夢中で目の前のことをこなしていけばよかった。文献輪読を行い、フィールドワークに赴き、議論をする。最初の一年間はとにかく体験し、吸収していくことに必死だった。ゼミに入るまでの僕は、まだ身体の動かし方を知らない、幼児のようなものだったといえるかもしれない。一年かけて徐々に立ち上がり、歩きはじめ、筋肉の動かし方を覚えていったのだ、と。

四年生になると、自分たちで企画を立て、高校生たちと関係をつくっていく段階にはいった。せつかくならずずっと続く関係を、後輩たちに引き継いでいってもらえることのできる関係を残したかった。そのためには、まず高校生たちに来てもらわなければならない。堅苦しい企画では来てくれないだろう。企画はとにかく楽しく、居心地のよいものにしなければならなかった。こうなると、ただ力を入れれば済むという話ではなくなる。どうすれば無理なく、継続して参加してもらえそうな環境をつくることができるか。考えた末に出した結論が、リラックスするということだった。

自らの足で立ち、歩くことができるようになって、無駄な力が入っているとどこかで無理が生じる。ずっと遠くまで歩き続けるためには、リラックスした姿勢で進まなければならない。そんな当たり前のことによろやく気がつくことができた。

「Friends Project2011 を振り返って」

4年 担当：4年FW班

氏名：新毛 聡一郎

今年度、私は4年FW班として7月、11月の映像ワークショップの運営に携わった。特に今年度の Friends Project は財団法人KIFからの助成金が出るなど、他団体との繋がりも生まれ、より「実践」「運営」に近いものが行えるようになったと考えている。

私個人としての役割は、会計としてそのKIFから頂いた助成金を管理し、子どもたちの交通費や食費などを上手く配分させてワークショップを成功に導く手助けをするというものだった。特に7月の映像ワークショップは助成金が出る初めてのイベントであったし、団体からお金が出るということは「そのお金に見合った結果、実績を残さないといけない」ということで、私たちは少なからずプレッシャーは感じていた。結果として「成功」したのかどうかは分からないが、財団の方が満足し、子どもたちの楽しそうな顔を見ることができたことにはとても安心している。「映像」というワークショップのコンテンツも、子どもたちの独創性やアイデアを一つの形にまとめ上げ、それを記録に残る形でプレゼントできるという意味で非常に有用だと感じた。子どもたちと一緒に撮影したミニドラマはいつ見ても笑えるもので、私たち学生にとっても忘れられないものになった。またこのワークショップを通して学生と子どもたちの間で連絡先を交換したり SNS 上で繋がったりなど、単なる「教え教えられる関係」を越えたことも大きな進歩の一つだと考えている。

3年生が行ったキャンパスツアーも成功したように伺い、活動を単体で見ると上手くいったように感じられるが、Friends Project 全体で見ると課題も浮かんでくる。

一ついえるのは、ゼミ内・そして子どもたち同士のつながりである。主に3年生が交流を重ねてきた中学生と、4年生が親睦を深めた高校生が一堂に会した11月の映像ワークショップでは、残念ながらお互いを分かり合うレベルまで達することができなかったように私の目には見えた。これからふれ合う機会を増やすことでそれも改善できるのかもしれないが、来年から4年生がいなくなることで高校生とのつながりは薄れていってしまうことを危惧している。

私が昨年からの Friends Project で感じたことは、2年間という時間の短さである。私の2年間は、学習サポートで子どもたちとのふれあい方を学び、中学生・高校生と個人的な関係を作ろうとするところで終わってしまった。就職活動やその他個人的都合で参加できなかった期間を考えると、中途半端だった自分がなんとも歯がゆい。自分に来ることは、この歯がゆさをこれからの代に伝えていくことなのだろうか。

『共生』と『対話』の間」

4年 担当：4年FW班

氏名： 村松 康彦

社会学は、その根源的な成立背景からして、社会一般と個々人の人生の間をつなぐ存在である。その事の持つ意味と、その学問の名を多少なりとも背負う我々の活動の意味を、ここに顧みることをもって、FP2011についての私の報告に代えることとしたい。

我々塩原研究会の所属学生は、「多文化共生」を学ぶことを目的として、川崎市桜本や横浜市鶴見区潮田などに住む外国にルーツを持つ小中高生を対象に、学習支援や文化交流などの活動を行ってきた。

それは、大きく社会的な文脈から見れば、国際的な労働市場における国境間の労働力移動の結果、国内において増加した「外国人」と日本人との共生の促進のための活動である。他方で、それは我々の個人的な文脈に即して見れば、大学の授業の一環として出会うことになった小中高生(ルーツの如何を問わない)との他愛のない対話の集積である。

このように仰々しいタイトルに齒の浮くような言葉を並べ、耳障りを良くしてみても、共生の促進も対話の集積も存在することがあり得たのか、未だに私の中の疑問は尽きない。現状として、彼らを取り巻く日本社会の環境は改善の動きを見せたのか。FP終了後の今、彼らと我々に残った関係性は何か。この報告を執筆するに当たって抱く疑問は、鮮明さを増すばかりである。

では、このFPは私に何を残したのか。それは、苦痛、あるいは、倦怠と名状できるような感覚に他ならなかった。日本の殆どの子供たちが、自明のうちに通ることとなる、学校教育(退いては日常生活すらも)という道のりを、彼らは手探りのうちに通っているという一事実がある。彼らはある種の「必然性」を持って、学習支援などの場に行き着いているのである。その現実には、彼らと我々との関係性についての、「触れ難い」一側面でもある。その「触れ難さ」に隠された大きな力は、私に目を背け、時に逃げ出したい感情を惹起させるものであった。

「共生」や「対話」にいくつ入り口があるのか私にはわからないが、しかし、この「触れ難い」何かに対峙していくことが、その入り口の一つであると言ってしまっても構わないように思う。そこでは、苦痛・倦怠という感情が避けられないものとして存在するであろうが、あるいは、これは、彼ら／我々といった特定の関係以前に、人間一般の本質的な苦悩なのかもしれない。

「共生」や「対話」とは一朝一夕に実現出来るような性質のものではない。FPが授業の範疇に収まる以上、それは限界も持ち合わせている。しかし、「触れ難さ」と向き合う真摯さが可能になる次元が、そこにはあるような気もしている。その次元を出発点として、FPが「共生」「対話」へと繋がる活動の端緒となることを願って止まない。

「2011年度FP総括」

4年 担当：三田の家

氏名：池田裕美

私が今年度関わったFPの中で唯一外国につながる子どもたちと接した機会は、春学期に行った映像ワークショップだった。その場をすぐに自分の空気にかえてしまう子から、もの静かで自己主張をあまりしない子まで、さまざまなバックグラウンドや性質の子どもたちが集まった。最も印象的だったのは、自分たちのグループで映像のストーリーを考えていたときのこと。日本語がほとんど話せずあまり自分から話をしなかった女の子が、自分たちの姉妹にあった面白い体験談を話し始めたが、ストーリーが複雑でうまく伝えることができない。すると別の女の子が、母語ではないスペイン語を一生懸命話しながら、その子の言わんとすることを聞きだそうとしたのだ。私たちのグループのストーリーは、この二人の体験談を組み合わせたものとなった。

この映像ワークショップでは、「私たち大学生」と「子どもたち」のあいだのみならず、子どもたち同士での交流シーンが数多くみられたのが最も嬉しかった。子どもたちのフィールドである街を歩きながら、実際に体を動かしながら映像をつくることで、教室に座っているだけでは見られない交流の場面が生まれた。企画した側の大学生も楽しめたとし、最初は演技をしながら嘔き出してしまっていた子も、観賞会を終えた後には自信がついたのか、「明日も来たい」と自分から言ってくれた。堂々と演技きった子だけでなく、監督やカメラワークに徹して自分の仕事をやりきった子もおり、それぞれの活躍の方法があったのが良かったのかもしれない。

これとは対照的に、私たちの拠点とも言える三田の家をハブとした活動も、今年度のFPの特徴と言える。ガレージセールでは、今までにないくらい長い間三田の家の前を歩きかう人を眺める機会でもあった。事前にフライヤーを配った時に「若い人がよく出入りしていると思っていたけど、大学生だったのか」と言うお店の人もいれば、当日大学生が何かしていると知ると立ち止まってくれる人もいた。夕方になると、犬の散歩がてら通り過ぎる人がチラチラ気にしているのがわかった。話しかけると最初は戸惑いながらも応じてくれたり、目の前に住む若い夫婦が数回にわたって買いに来てくれたりした。近所の人にとって、三田の家は「よくわからないけど、何だか気になる場所」なのかもしれない。このような地域に開かれた取り組みのみならず、対話型観賞会や映画鑑賞など「興味」を通して人が対話できる場所になりうることも、数多くの企画によって示された。料理を食べながらじっくり人やものと向き合える空間として、より多様な人がつながれる場所として、三田の家が認知されていくといいなと感じた。今年のFPは、個人的な時間の制約により、企画段階から関わったプロジェクトはほとんどなかった。昨年と比べて現場に足を運ぶ機会が激減し、そのため「何のために」「何を」という動機付けがあまりできなかったのも事実である。プロジェクトの企画において、現場のニーズより自分たちの活動の成果が無意識に先立っているような気がして、昨年と重なるところもあるが、秋学期の企画段階では不安を感じたときもあった。想定していた人を巻き込めなかったときには特にそれを感じたが、一方でゼミの活動を通して人をつなぐ場所づくりができたと感じる場面も数多くあった。

映像ワークショップ当日・・・

「○○ちゃん、愛してる！！！！」

鶴見駅周辺の道路で私は叫んだ。ゼミ生、外国に繋がる高校生、通りすがりのおばちゃんなど、多くの人にクスクスと笑われたが全く気にならない。むしろ称えられているように感じられた。こうして振り返っていくと映像制作の面白さを体感した貴重な一日だったと思う。

例えば「仲良くなる」という意識を持って交流するアイスブレイキングとは違って、無意識のうちに仲を深めることが出来ること。決められたセリフだとしても初対面の人とすぐに“会話”が出来るし、手を繋いだと思えば、一緒に踊りもする。気が付いたら普通に話せるようになっていたのは私だけではないと思う。

また、撮影中に与えられた役の演技方に対して「良かった！」や「もうちょっとこうした方がいい」など、必ずフィードバックが生まれること。最初は恥ずかしがっていた高校生も自分が表現したものに対して少なからず何か返ってくると分かれば、その期待に応えようと頑張ってくれるようになっていった。一つ出来るとまた次も出来そうだという流れが生まれていた。高校生たちに対して自ら行動していく意欲を少し生み出せていたのではないだろうか。

映像制作は私達が普段出来ないと考えていたことも「映像を撮る」という理由が背中を押してくれる、何か特別な権利を得たかのように伸び伸びと行動出来るようになる不思議な時間を与えてくれる手段であるように感じられた。

今後も暇があればカメラを手に見ようと思う。

「今年の私はゼミの活動から離れすぎた」

この報告書を書くにあたって一番最初に頭に浮かんだ言葉だった。それを強く表したのがある日私が「三田の家」で感じたことだ。

私は小学生の時から海外を転々としていたため、住んでいる場所に居座る事がないという前提を持って生活していた。「どうせ日本に帰るのだから」無意識にそんな事を考えていたのだろう、住んでいる国や地域の事をあまり気にしたことがなかった。「ほっとする場所」や「自分らしくいられる場所」は一緒にいる人がもたらす空気感の事を指していた。

しかし、人生で初めて私は一定の場所に対して「居場所」であることを求めた。それが「三田の家」だった。駄菓子屋に行けばいつものお菓子とおもちゃがあり、昭和の懐かしき時代を思い出させるのと同じように、私はなんとなく自分の中で「三田の家」像を完成させていたのだろう。2011年度の活動が始まり、訪れる人によって全く違う空間になることを認識すると、その違いにしか目が行かなくなっていく。「去年はこうだったな」過去と比較ばかりする。出席率の低下に比例して変化する現場に追いつかなくなっていく。しかし、私は現状を把握していると思いたいがために、真摯に目を向けなくなっていく気がする。私はいつの間にか「三田の家」で生まれる多様性を否定していたのだろうか。変化に対して恐怖を抱いたのは初めてだった。

誰かに変化を求められていなくてもしなくてはならない時にどちらも見捨てないためにはどうするべきなのか。自分なりの答えをこれから見つけていきたい。

「個性の尊重」

4年 担当：三田の家「演劇Night」

氏名：井上翠

2011年11月15日18時15分から三田の家で行われたサブゼミは、「演劇Night」と称して社会問題を広く知らせる演劇の可能性について考える会を催した。前半に立川で憲法ミュージカル¹を立ち上げられた弁護士・小林善亮先生に立ち上げの経緯を伺い、皆が憲法ミュージカルへの理解を深めた上で、後半は実際に演じてみる時間を持った。

○反省点

ミュージカル『ドクターサブ』を皆で演じた「演劇Night」。遠くの出来事に思いを馳せるとき、最も効果が得られるものは何か。考えた末出てきたのが、そこに暮らす人を自らが演じるという演劇であった。30年前のアフガニスタン人に極限まで近づく、そうすれば演じ手は今まで体験したことない境地に達するのではないか。ワークショップを終えてみて、これは演劇好きな私の勝手な願望であって、多くの人から「楽しかった」と感想を頂いたことはコーディネーター冥利に尽きるのだが、どこか100%満足できない自分がいた。

尊厳の再生。食糧に満ち溢れ、平和を享受する日本の大学生にとってこれほど難しいテーマはないと思う。世界中をあちこち飛び回っている塩原ゼミ生ですら、尊厳という語にピンとこない人もいるのではないか。かくゆう私もその一人であり、演じてみればわかるようなものではないのだ。人を正確に理解するなんてできるはずがない。なぜなら、私たちは2011年に東京に生きる大学生であり、30年前のアフガンの市民ではないからだ。そんな当たり前のことを、改めて自覚したワークショップであった。

「知る」とはどこまでをもって「知る」なのか。提示された情報を理解する・その場で興味をそそられる・関心を持って後まで考える・思考に影響を与え行動に移す、私なりに「知る」を分類するとこの4つになる。その場限りの演劇に出来るのは2点目「その場で興味をそそられる」だと思う。役を想像し、皆で議論して自分なりの工夫を加えて舞台にのせる。その過程は役との対話、仲間との対話であり、教室で一方通行的に教わるよりもはるかに有意義だとは思うが、それは全て「楽しいから」に尽きる。その先まで、が足りない。

○今後・展望

芝居には正解がない。同じ役でも演じ手次第で芝居が変わる。役と役との掛け合いで作品全体もかわってくる。一人一人が自由に想像してあれこれ考えたことが、そのまま舞台にのる。全て国民は、個人として尊重される(憲法13条)。憲法ミュージカルでは「個性の尊重」がコンセプトにあると小林先生に教わった²。じっくり考える機会が保障されている、これこそが憲法ミュージカルが持つ最大の強みではないか。

即効性はいらぬ。種まきでよい。今回じっくり考えたことで、何年か後にひょんなことから思い出される時が来ればそれでいい。そうそう変わることもない個人の思想・価値観をじんわり真から変革をもたらす手段が演劇なのだと思う。

ひとつ。今回は変人集団の塩原ゼミ生だからよかったものの、芸術を否定する人には通用しない。対象を排除してしまう点が課題である。

¹ 憲法ミュージカルとは、弁護士が市民100人と日本国憲法について理解を深めるために設立された市民ミュージカルのことである。憲法のメッセージ(平和・尊厳)を伝える脚本をもとに、舞台づくりを通して憲法の理念(国民主権・民主主義)を体感する。卒業論文で大阪・神戸 憲法ミュージカル2011を取材したご縁で、今回、東京の憲法ミュージカルを立ち上げられた小林弁護士を三田の家にお招きすることになった。

² ハンセン病患者役を演じた新毛君の演技を見て、小林弁護士は「セリフ待ちの間、患者になりきっていたのは君だけだ。これが個性」とコメントされた。

「川崎ラヂオの活動に参加して」

4年 担当：ふれあい館

氏名：君島龍一

三年生の頃から思っていた。「せっかく繋がりができても卒業したらサヨウナラなのだろうか？」

真剣に皆と議論してきた。「どうしたら“彼ら”の為になるのか。」「どうしたら“彼ら”と近づけるのか。」

試行錯誤し、徐々に彼らとの繋がりが出来るようになった。それは楽しい時間だった。

でも、ひとたび卒業をしてしまえばもう彼らとの接点はなくなるのか？文字通り、“平行社会”で暮らすことになるのか？

そうになってしまうと、「今まで散々考えた、議論した時間は何だったんだろうか？」という疑問が湧く。ゼミで生まれる繋がりは、あくまで“慶應大学生の勉強の一環”に過ぎないのか。あの言葉達は、あくまで“方便”だったのか。三年生の自分はそう感じていた。

そう感じつつも、三年生も終わりになると現実的に“シューカツ”が迫ってくるわけで、自分の“将来”も考えなくてはいけない。言ってしまうと「卒業してから彼らとの繋がりを保つのが難しいのが社会の現状」ということ。卒業生が皆“ボランティア”や“活動家”になれば全ての問題が解決される、というわけでもないし。

「塩原ゼミで得ることのできた“モノサシ”や“視点”を大事に、これから出ていく社会を生きていくことが大事。」まとめればそういうことだろう。そう納得させた。

若かった君島もそんなこんなで四年生になり、ふれあい館の川崎ラヂオの活動に参加させてもらうことになった。

結論から言うとふれあい館川崎ラヂオはとても居心地の良い“場所”だった。「面白いことをしたい。皆が繋がる“場”を作りたい。」という考えのもと行う活動は率直に“楽しかった”。企画者のフニさんも忙しい合間を縫いながらの活動で、月二回のペースで進むことが最近決まった。「絶対参加！」という制約もあえて作らず、なんとも心地良い“ゆるさ”も兼ね備えていた。卒業してからも続く川崎ラヂオ、そしてこの“ゆるさ”は前述の「卒業してから繋がりが無くなるという違和感」を解消するものだった。

ただ、「自分が都合の良い時に行ければ良い」という考えは自分本位な考えでもある。その考えだけではいけないということも学ばせてもらった。

そのことを踏まえた上で、これからも川崎ラヂオに通いたい。どれだけ行けるかも何が出来るかも分からないけれど、ずっと心は寄せていたいと思う。今ではそう思わせる“場”になった。

縁・演・塩

4年 担当：日吉 Campus Tour, 映像 Workshop

氏名： 向井貴信

忘れられない1年となりました。

2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震発生、
都内の建物が大きく軋む音やエンエンと鳴り続ける警報は、今でも耳に残っています。
震災の様様を映すTVを見て、茫然とただ言葉にならない恐怖を覚えました。
なにか自分にできることはないかと、あれからずっと模索や試みを繰り返しています。
これからもその試行錯誤は続いていくでしょう。

3・11を、そしてその自分なりの意味を考える一方で、貴重な経験をすることもできました。
映画『空喰いの橋』の制作に参加させていただき、僕は渡瀬成実役として出演しました。
この作品の監督は塩原ゼミ2期生の中村研一郎さん、原作は同2期の蜂屋絵美里さんで、
塩原ゼミにとっても強いつながりのある映画です。
この映画のおかげで2011年は、渡瀬成実という人物とトコトン向き合った1年になりました。
恐ろしく濃密な365日。多くの縁に恵まれ、彼を演じる機会をいただけたことを嬉しく思います。
彼の目を通して、この世界の、この社会にある様々なものを見ました。
2012年1月23日現在でも、渡瀬と自分が出会う前の感覚のようなものは戻っていません。
このまま僕は元へは戻らずに、また次の変化へ向かっていくのでしょうか。

本当にこのゼミは興味深い空間であり、セレンディピティの源となる時間でした。本当に、底抜けに。
塩原ゼミは自分が変わる事へのきっかけと勇気を与えてくれる環境だと思います。
また、立場の互換性、対話の意義、協働、空間と時間、想像、境界線と歴史、コンテキスト等々…
個人や社会の諸現象に見え隠れする概念への示唆と多くのキズキを与えてくれました。
そしてなにより誠実さと謙虚な姿勢の大切さを教えてくれました。
ここまでほとんど僕個人についての話のようになっていますが、それは同時に Friends Project の報告
でもあるのです、僕にとっては。
それは僕の言動の端々に、僕の思考の裏に塩原ゼミで学んだことが息づいているからです。

「知識」は大切です。だけれど、「お前の眼にはいま何がミえている？」と自問できるモノの見方、
そして「誠実でいられる理由」を見つけるための対話の機会を得ることには、それ以上の価値がある。

日吉 Campus Tour と映像 Workshop、『楽しく』取り組むことができたプロジェクトを担当したので、個
人的にはとても満足しています。全体の Friends Project もみんな楽しめたんじゃないかな？
今年度ゼミとしての Friends Project に貢献できたのかはわかりませんが、塩原先生やゼミ生のみんな
から教えてもらった事がなければ実現できなかったことがたくさんありました。

本当にありがとう、「これからも頑張ろう！」

2012.01.23.

「議論から対話へのつながり」

3年 担当： 授業係

氏名： 阿部 優衣

前期のフィールドワークが始まった当初、私はゼミの活動に不安しか抱いていなかった。初めて鶴見夜教室を訪れた日は、名前を教えただけの自己紹介を終えるとすぐに中学生たちに勉強を教える体制になって、ぎこちないまま一生懸命笑顔を作っているゼミ生たちの間には違和感が漂っていた。そのまま数回のフィールドワークを経て、私はその活動に「フィールド」という実感を伴わせることができず、普段のゼミでの文献輪読や三田の家で開かれていた「卒論オープンセミナー」と土曜日の鶴見夜教室との間にギャップを強く感じるようになった。そんな、私が常に感じていた不安を、言葉に出す機会を得たのは、春学期末のグループ発表の準備を始めた時。

「中途半端な学習支援は無責任ではないだろうか？」

ゼミ生にとっては既に用意された「フィールド」の上で、手探りで始めたフィールドワークだけれども、高校受験を間近に控えた中学生たちにとっては、大切な人生の一部。思い返してみると、私が高校受験のために通っていた学習塾では、先生たちは与えられた時間の中、全力で勉強を教えてくれた。しかし、そんな中、こんな疑問が湧いてきた。

「でも、私たちって本当に夜教室の「先生」でいいの？」

そこで、私たちは改めてゼミとして鶴見夜教室に関わっている意義について議論を重ね、私たち自身を、「先生」でもなく「生徒」でもない、その中間者としての「チューター」の位置づけをするまでに至った。

そして、夏合宿では、さらなる春学期の活動の振り返りをし、反省点を挙げ、後期の活動をどのようなものにするのかゼミ生全体で考えた。私は、ようやくこの時からゼミ内の「対話」が成立してきたように感じる。

また、春学期の反省点として、「連続性がなかった」ことも挙げられた。春学期の文献輪読では、社会学を幅広く扱い、毎回の授業内議論が断片的なものであったことから、秋学期では毎回の議論をつなげよう！という目標とともに「授業係」が立ち上げられた。授業係の役割は、文献自体の抽象的な論点に特化した授業内での議論から、夜教室で感じていること等に当てはめて具体的な議論に発展させることで、文献と「フィールド」につながりを与え、連続的な議論を生み出すことであった。けれども、秋学期では授業内「対話」が多くみられたため、授業係として意図して新たな働きかけをする必要性があまりなかった。これも夏以降から「対話」が成立していた結果から生じたものなのだと思う。私たちがこうして積み上げた「対話」から、来年度はまた次の「つながり」を生み出したい。

「私は誰か」

3年 担当：つるみ夜教室

氏名：金 亨喆

私は誰か？

フレンズプロジェクト。私は夜教室の先生の一人でありながら、私自身が外国につながった、つながっていると思っている塩原ゼミ生徒である。私は日本に生まれた外国人で彼らも日本に生まれた外国人。しかし、私は学習指導を行う側で彼らは受ける側である。私は一般的にオールドカマーと呼ばれる在日コリアンの3世で彼らはニューカマーと呼ばれる子どもたちである。彼らは数学の、それこそ因数分解を解かなければ高校に行けない。だからこそ数学の問題を解く必要があつて私はそんな彼らをゼミ生として参与観察する必要がある。私は時には先生でありながらゼミ生であり、それでも私自身が外国につながっているのである。

フレンズプロジェクト2011は「対話による相互成長」をprincipleにしながらいわれてきた。この中で、つるみ夜教室、およびフレンズプロジェクト全体で私は、いつも自分は誰なのだろうかということに悩まされてきた。私は外国につながっているはずだが、間違いなく彼らとの立場に非対称性がある。私は彼らと同じ部分を大事にしたいと思っている反面、対話を試みようとするたびに違いが見えてくる。人間ひとりひとりの個性と言うのももちろん行える議論ではある。我々側が対話を試みようとするという非対称性がすでにそこには存在するというのももちろんだ。しかし、外国につながるという意味では同じであるはずの私との間に開かれたギャップこそが私が一番に観察すべきものであった。このギャップを私自身の目で、我々の対話というアプローチにどのような効果があるのか、「お知らせ」してくれる。そして、私は対話の有効性を信じている。

夜教室の生徒は対話を時にはダイナミックに時には静かに続けている。ある生徒は私と話すのが楽しいと言ってくれ、他のある生徒などは学校の3者面談に呼んでくれた。全ての生徒とは言わないが、それぞれの生徒に対して、対話という方法を用いてなにかの変化が起きたのは明確だ。ある生徒の変化は言葉に簡単にできる。ある生徒の変化はまったく言語化できない。しかし、それでも全ての生徒が変化したと私は感じている。私は彼らとの対話で自分自身を見つめなおし、また自分自身だけが持つ「外国につながる」を考え直している。自分自身と対話し、その上で彼らと対話し、さらには自分自身の中で彼らと私が対話している。

私の中でフレンズプロジェクトは対話の可能性を信じ続けることであり、またその中で自分と対話する中で自分は誰かを探し続けるものだったと今では感じている。私は誰か？今後も対話を通して私は考え続けるのだろうか。

「身構えすぎないこと」

3年 担当：潮田小班

氏名：桑田 恵理華

私は、この一年間潮田小学校の児童達、塩原先生、ゼミ生と過ごす中で、「身構えすぎない」ことの難しさと大切さを学んだ。

毎週水曜日、鶴見の潮田小学校に足を運び、宿題のサポートを中心とした学習支援を行った。ゼミに入ってすぐの春の頃は、「外国人国籍を持つ児童達」という意識が強すぎたあまりどのように児童達と接したらいいのか分からなかった。児童達が抱えている問題を親身になって一緒に解決していきたい。学校のクラスの友達には言いにくいとも言えるくらい信頼関係を気付きたい。今思い返すと、自分が持っている固定概念や価値観を押し付けていたのかもしれない。児童達に祖国のことを聞くと、「ブラジルで生まれたよ！」と陽気に答えてくれる一方であまり当時の生活のことは覚えてないという答えの方が多かった。そして、児童達は不思議そうに「何でそんなこと聞くの？」と聞いてくることもあった。そんな中、毎週1回だけでも共有する時間が増えていくうちに少しずつ彼らとの距離も縮み始めた。そして、その中で、児童達との距離を自分から作っていたことに気付かされた。児童達は純粋にお手伝いの一人のお姉さんとして慕ってくれる一方で、私は彼らの生い立ちを気にしすぎていた。それからは、児童達と他愛無い話も出来るようになり、少しずつ自分達の抱えている問題を打ち明けてくれることもあった。この時に、信頼関係を築くことに固執せずに、身構えすぎないで児童達と接することが距離を縮める近道なのではないかと感じた。しかしながら、同時に大学生側の事情で毎週コミットすることが難しくなった秋学期を振り返ると申し訳ない気持ちでいっぱいになった。時間をかけたからこそ生まれる信頼関係も行く回数が減っていくにつれてせっかく心を開いてくれるようになった児童達に対して自分から再び距離を作ってしまったてはないだろうかという気持ちが強かった。来年度も続いていく FRIENDS PROJECT であるが、コミットし続けられる環境づくりについてもう一度考え直すことでよりよい関係が形成されると期待できる。

本年度の FRIENDS PROJECT のテーマとして「対話による相互成長」というものがあった。相手と年齢、立場、価値観が違うからこそつながりを持つことで新しい発見が生まれる。そして、その発見を通して吸収するものは双方で異なったとしても何かしらの刺激を受けていることには変わりはない。このテーマは、来年度も常に意識し続けたいと強く思う。

「小学生とのかかわりを通じて」

3年 担当：潮田小学校

氏名： 桂 竜馬

今年度の私の Friends Project は、文献輪読など教室内で考え、フィールドワークを通じて教室の外で行動する二つの大きな側面を持っていた。その両方ともとても学ぶことが多く、切っても切り離せない重要なものになった。

私は、塩原ゼミのフィールドワークとして潮田小学校という鶴見にある外国につながる子供たちが多く在籍する小学校にて活動をしてきた。ほかのゼミ生のほとんどが中学生と活動していたのに対し、小学生と一緒に活動していた私は少し違った経験をしているかもしれない。

よる教室で中学生の指導をしているゼミ生の話を聞いていると、受験を目前に控えた状況や、中学生という一番繊細で難しい時期にいる生徒たちとの関係を築く上で色々な難しさや苦悩を抱きながら活動している部分もあるのではないかと感じた。それに比べると、私が接している小学生というのは年齢的にも精神的にもまだ素直でわかりやすいので、そういった面で接する上での違いはあるかもしれない。ただ小学生ならではの難しい面もあり、どうしても一度集中が切れてしまうとなかなか勉強する気になってくれない。私は潮田小学校にて小学生を指導する際は、どのような方法でも最終的に勉強をしてもらえるよう導くことを意識している。外国につながる子供たちが集まる潮田小学校において私の参加意義や役割は、日本の小学校に慣れてきた子供たちに対して、今度はどうやって勉強するかを教えたり、彼らに勉強をする習慣を身につけてもらうサポートをしたりすることだと考えている。ちょっとふざけたり、遊んだりくだらないことをしても、最終的にそれを勉強につなげるよう心掛けているが、なかなか難しく試行錯誤しながら実践している部分も大きい。

そんな小学生とかかわり、彼らの行動を通じて感じるのは、人生経験が少ない分余計な先入観を持たずに人とかかわることができ、そういう要素は多文化共生を実現するために必要なもののひとつなのではないかということだ。文献輪読にて議題になったこともあるが、固定観念や先入観には個人に対してイメージや特質を押し付けてしまう危険性があると思う。それは年をとればとるほど、経験をつめばつむほど積み重なっていく自分勝手な偏見かもしれない。そういった偏見は、人との関係を築いていくにあたって、自らをスタートラインより数歩後方へ追いやってしまっている要因になっているのではないだろうか。そういう観点からみると、バックグラウンドから個人の性格を決め付けるだけの情報を持っていない小学生は、自分とは違ったバックグラウンドを持った人とでも、余計な先入観を抱かずに本来のスタートラインから関係を築き上げていくことができているように思える。

「疑い続けるということ」

3年 担当： 夜教室

氏名：清水 勇登

まず、私が担当していた「夜教室」での活動で感じていたことについて記する。

私の夜教室の反省として、「生徒たちと踏み込んだ会話が出来なかった」ということがあった。ただ、勉強を教え、趣味の話をし、それで終始していた。いや、会話内容に限らず関わり方含めて全てが表面的である感覚を常に拭えなかった。

それが、変化したのが後期の活動であった。受験も控え、より踏み込んだ話をしていく中で彼らの背景が、明らかに自分とは異なるということを意識せざるを場面が多々あった。「親が全く受験に対しての知識を持たない。」「今までやってきたのが家の中でポケモンをやる程度で、外に連れて行ってもらう機会など特になくから「夢」の持ちようがない。」上記はあくまで一例だが、その様に私と彼らが「違う」ことがより明確に気づいたのが後期である。しかし、彼らが自分から見て生まれの違いから「他者」であったのであるかという、それもまた異なると考える。上記で感じた「違い」を含めて尚、私が接している彼らは、間違いなく『ふつう』の中学生であり、生徒であり友達だ。そもそも、「生まれ」が誰しも異なるのは当然である。そこから、「多文化共生する」という言葉自体が不確かなもので、そもそも「多文化共生している」人間は別に自身はそう思っていないのではないかと感じた。あくまでそれも、当事者でない「他者」からつけたラベリングにすぎないのではないか。

さて、知ったような口を利いてしまったが私は「共生」出来ているのだろうか？その点に関して私は胸を張ってイエスと答えることが出来ない。というより、「互いの差異を認めあえている」と思った時点でその人はどこかに目をそらしていると思う。

企画『外国人セッション』でゲストの小川様がおっしゃっていたことを思い出す。「受験で進路とか選ぶと思うけど・・・正解とか、何が正しいとか、誰も分かんないよ。未だに私もわからない。ずーっと疑ってる。でも、そうやって答えが出なくても考えることが大事なんだよ。」

疑い続けることが大事であり、常に彼らと、そして自分と対話を続けていく必要がある。FP全体も、同じことが言えると思う。

対話型セッションや、留学生の方のお話など、つながりえない方々とつながりがうまれ、そこから学びを生むことが出来た。だがしかし、あくまで我々が生んだのは「数字という結果」などではなく「人のつながり」だ。ここで終わるものではない。FP' 11は終わるが、あくまで我々が生んだのはきっかけにすぎない。そして、常にその意義を問い続けていかねばならない。そこからまた、次のつながりを産んでいくのであろう。

「まだ分からない」

3年 担当：夜教室

氏名：萩原 沙織

「フィールドワークが楽しそうだから塩原ゼミに入ってみたい」なんてことを言っていた1年前の入ゼミの時。1年間のつるみ夜教室でのFWとFPがもう終わろうとしているなんて信じられない。そんな中私は秋学期から夜教室系の1人として活動させていただいた。

FWを積み重ねる上での数々の課題。

生徒と自分とのギャップ。生徒達との距離感の取り方。勉強と遊びのバランス。ただの大学生である自分が担えるロール。進路に対しての向き合い方。

常に何かについて悩み、ゼミ生と話し合っていた。話し合いを重ね、お互いの思いを共有し、キャッチボールすることの大切さを知った。夜教室を100%「受験勉強のため」の場所にするか否かでさえ、FWのやり方には「これ」という正解がない。だからこそ、皆が納得して決めた方針で挑戦してみ、結果を待ってみるという、今までの高校の部活とかでいわゆる結果至上主義な環境にいた私にとってはとても新鮮で、どうしたらいいか分からないから歯がゆくもあった。

そして印象に残っているのが、受験対策のスケジュールを確認していた時だれかがふと言った「もっと早く出会っていたかったな」という言葉。特に中3の生徒に関しては、やっと仲良くなれたと思ったらもう高校について考える時期にさしかかかっていて、駆け足で進路対策せざるをえなくなってしまう。もっと早く出会っていたらどう変わっていたのかは分からないけれども、学習支援には継続的な時間が必要だということ、加えて、いくら目の前にいる子供達をサポートしているといっても、制度が変わらない限り、根本的な解決はされない現状を思い知らされた。

夜教室で、家族でも先生でもNPOのボランティアでもなく、かといって100%赤の他人でもない、すごく微妙な場所に位置する私達だったが、そんな私達だからこそなれるロールがあるのは確かだと思う。約1年間生徒達と一緒にいて、夜教室以外で会ったり、メールしたり、勉強以外の事も相談してくれるようになったのはとても嬉しかった。ただ、自分のとった行動の選択や、生徒との間に出来た関係が生徒達の人生にとって「良かった事」につながるのか、まだ自信を持って「はい」と言えるかは分からない。彼らが私達のことをどういう風に思っていたのか、どういう存在として毎週会いに来てくれていたのか、結局わからなかったし聞けなかったからである。ゼミに入るまでは「2年間のFW」と思っていたけれど、生徒達も私達も変わりゆく環境の中で生きていて、FPが一区切りついても私達の関係に終わりはない。そして、何年も経って振り返ってみてやっと、自分たちの行なったことがお互いにとってどうだったのか、その答えがなんとなく見えてくる気がする

「Friends Project の可能性と限界」

3年 担当：三田の家、ガレッジセール

氏名：本澤 真綾

2011年度のFriends Projectについて、私が主として関わった三田の家（ガレッジセールを中心に）と鶴見夜教室について振り返ってみたいと思う。

＜三田の家について＞

三田の家では「対話の場」を提供し、ゼミ生、他の大学生、地域、外国につながる子供たちをつなげよう、という目的で様々なイベントを企画してきた。私が担当したガレッジセールでは、残念ながら外国の子供たちと地域をつなげたい、という目標は達成できなかった。高校生に呼びかけたのだが、結局来てもらえなかったのだ。高校生の子供たちの心を驚掴みにするようもう少しCOOLなイベントを企画すべきだったか、前々から高校生との交流を綿密にとるべきだったかと反省している。とはいえ、ガレッジセール当日には、思っていたよりも多くのお客さんが来てくれた。「若い子の服しかないもの、これなら切れるかしら？200円？200円ならいいわよねえ。」などと言いながら服をたくさん買って行ってくれた近所のおばあちゃん。子供のクリスマスプレゼントに、と嬉しそうにゲームソフトを買っていく居酒屋の店長さん。芝の家から元気いっぱいの子供たちも襲来した。普段は学生の姿しかない三田の家に、様々な世代がたむろする。そんな不思議な光景が見られた。とはいえ、まだこのイベントは第一歩でしかない。三田の家が様々な世代、職種、国籍の人が集まって対話できるような学びの場になるために、今後も三田の家という媒介を使って、様々な人々を巻き込んでいけたらと思う。

＜鶴見夜教室について＞

Friends Projectのフィールドワークの一環として、鶴見夜教室に足を運んだ。鶴見に通っている外国につながる子供たちとの出会いは、私を確かに「変容」させた。彼らとどう付き合っていくべきか、友達のように、お姉さんのように、先生かと思えば、保護者のようでもある。そのどれでもない、というのが正しいのかもしれない。彼らと深く関わっていくほどに、彼らの前に立ちはだかる「受験」という問題が自分のことのようにのしかかる。本当は一分でも一秒でも勉強を見てあげたい、是が非でも高校に合格してほしい、さらには、高校でも途中でやめてしまうことなく、元気にやってほしい。だが、私たちにも彼らと向き合える時間は限られていて、特にこの受験期と就職活動が重なる今の時期はじれったい気持ちでいっぱいだ。

私の思うFriends Projectの限界はそこにある。Friends Projectはゼミ生の裁量によって自由に形を変えられ、その点では可能性は無限大である。一方で、Friends Projectはあくまでゼミの活動の一環であり、全体重をかけて取り組むことは難しい。子供たちの人生に片足を突っ込んでおきながら、こちらは生活の一部でしか向き合えない、そこに私はジレンマを感じ、またFriends Projectの限界を見た気がした。

「Friends Projects2011 を振り返って」

3年 担当： 三田の家

氏名： 笠間 佐和子

「三田の家」は塩原ゼミにとって、“ホーム”のような存在だと私は思う。そんな「三田の家」という場を介し、ゼミ生を始め、学生、地域の人々、外国につながる子供たち等、様々な人々との“つながり”をコンセプトに三田の家班は活動してきた。活動にあたり、三田の家係はファシリテーターとなり企画を先導するのではなく、あくまで各企画のファシリテーターや三田の家利用者が動きやすいよう、サポートに徹することを心がけた。三田の家に集う人々が、なるべく主体的に参加できる場をつくりたかったからである。しかし、どんなに対等な関係のもとでの「対話の場」を提供しようとしても、三田の家が塩原ゼミの“ホーム”である以上、ゼミ生が「ホスト的存在」であることは否定できない。事実、私達は“つながり”という目標をかかげ、各企画ごとに狙いを定めて活動をサポートしてきた。各企画の目的や流れに私達の意図が含まれ、三田の家という場に相手を“招いている”以上、ゼミ生が「ホスト」で三田の家に集う人々が「ゲスト」という側面をもつのは避けようのないことだろう。だが、それがすべてではなかったと私は思う。実際、飛び入りのゲストや自由な意見によって、思ってもみない方向へ企画が進むことはままあったし、印象的な出来事は常に“予想外の対話”から生じていた。これは、私達が完全に「ホスト」となり、企画を運営していたら起こり得なかった対話だろう。では、なぜそのような“予想外の対話”が生まれたのだろうか？

私は「三田の家」という空間だからこそ、そのような対話ができただと思う。三田の家では、対話を目標としながらも「話しても良い」、「話さなくても良い」という選択の自由があったように感じる。その圧力のない空間は、「ホスト」と「ゲスト」の枠に縛られず、より対等な関係を目指したからこそ得られたのではないだろうか。「対話」をしやすい、自由度の高い空間・環境づくりで大切なことは、「対等であること」ではなく、「対等であろうとすること」なのだと私は思う。

同じようなことは、つるみ夜教室のフィールドワークからも感じた。完全な大人でも、保護者でも先生でもなく、友達のような先輩のような中途半端な私達には、中学生達の勉強への強制力も進学に対する責任も持てない。しかしだからこそ、学校とも家庭とも違う、かれらの「居場所」をつくれるのではないかと思う。ここでいう「居場所」とは、「三田の家」のような圧力のない自由な対話が望める空間だろう。中学生と私は決して同じポジショナリティをもつわけではない。けれど、「同じ」ことが必ずしも「対等」なのではなく、また「対等であること」が対話の絶対条件でもない。大事なことは、お互いのポジショナリティやバックグラウンドの差を受け入れつつも、「対等であろう」と相手を思いやる想像力をもつことだろう。今年度の活動で「対話」が実践できていたのか定かではないが、今回学んだ「対等であろう」という姿勢を忘れず、まずはこれまで「三田の家」で得た“つながり”を一時的なものではなく、蓄積し広げられるよう努めたいと思う。

「シーソー」

3年 担当：3年FW班

氏名：金藤 達紀

私がこのフィールドワークを通じて常に考えていたこと。

それは、「彼らとどれくらい近付き、そしてどれくらい離れるのか」ということだった。

彼らとの位置関係は、私だけではなく誰もが答えの見つからないまま常に思いを巡らせていたテーマだったように思える。

フィールドワークを始めた頃の私達の最初の目標。

それは、「生徒達と仲良くなって、心を開いてもらうこと」だった。

その目標は次第に果たされ、時が経つにつれて生徒達も次第に心を開くようになっていった。その時は、うまくいっていると思っていた。

でも、次のステップに差し掛かった時、それだけではいけないことに気が付いた。

仲良くなるだけでは彼らの学力を伸ばすことができないことの悩み。

仲の良さが馴れ合いに変わり、教室全体に締めりがなくなってしまったことの悩み。

あれこれと思い悩む中で、私達は「彼らから少し離れてみる」決断をした。

それからは、近付いて、離れてのくりかえし。

どの距離感がベストなのか、残念ながら私の中でも答えは出ていない。

さらには、生徒と教師、友達という構図と少し違う次元での葛藤も生まれた。

それは、「研究」や「観察」の視点だった。

彼らと一人の人間同士として向き合いたいという思う参加者。

彼らを外国人という枠で捉え、社会的な視点から検討したいと思う観察者。

その間を行き来することで、私達は混乱と矛盾を感じることも多かった。

出来るなら彼らのエスニシティを汲み取りながら、一人の人間としても向き合っていきたい。

でも、エスニシティは、日本に住む中で植え付いた「日本人らしさ」とまざりながら彼らの全てを形成している。

「一人の人間としての彼ら」と「ルーツに起因する彼ら」を別々に抽出することは出来ないように思う。

このことに関しては、私は「一人の人間として彼らと向き合う参加者」でありたいと思っている。

彼らという人間から、「外国」という要素を無理やりえぐり出すことはしたくないから。

もしその中で彼らのルーツを意識させられる問題に直面したなら、その時には向き合っ、何か方法を考えていけばいい。

まだ通過点にすぎないが、この一年を振り返って、私はそう思っている。

「中途半端を選ぶ」

3年 担当：三田の家

氏名：山崎紗也加

「中途半端」を選んで本当に、良かったと思っている。

まず、後期から始まった三田の家班についてである。何より、三田の家で企画したイベントは全て楽しかった。その中でも非常に印象に残っているのは、ミュージアムでの学びについて研究する平野智紀さんをお招きし、対話型鑑賞会を行ったの日のことである。実践するうちに美術に壁を感じていた人々の目がきらきらしたものにみるみる変わり、私はとても嬉しくなってしまった。また、すべての実践を通して、様々な事象に対する個々人の「ズレ」こそが対話の必要条件であること、そしてその「ズレ」を感じながら話すことは思いのほか楽しいことでもある、ということに気づかされた。「ズレ」に対する答えも、問題に対しての明確な答えも決して得られることは無く、客観的に見たら中途半端に漂っていたようにも思える。しかし、その中途半端さに対する思いから、「三田の家」を出てからも、問題を他人事ではなく自分事として考え続けることができた気がする。つまり、多様な他者が、人が一つの場所に集まって「対話」をすれば、その空間内での出来事に関して参加者は必ず当事者になるのだ。

これらの「変容」や「対話」を可能にしたのは、三田の家という「空間」そのものに拠るところが大きい。そう考えた場合に、対話が生まれる場所として、何が必要なのか、何が対話を阻んでしまうのかについて、空間全体のレベルで考えていくことが重要だということがわかった。

次に、夜教室運営についてである。夜教室では、まさに終始一貫「中途半端」であったように思う。はじめのうちは何をしたらいいのかわからず、しばらくすると「先生」なのか「友達」なのか「支援者」なのか、はたまた「外国人」であることを意識するのかしないのか、様々考えてみたものの共通見解はない。しかし、何者でもない私たちは何者にもなれるのではないかと、「中途半端さ」をプラスの意味として捉え直すことができたひとつのきっかけとなる出来事があった。生徒が教室の椅子を不注意で壊してしまい国際ラウンジの方に謝罪にいったとき、スタッフの方が「今後気をつけてください。でも、怒りすぎないであげてください。こんな生徒さんと皆さんの関係は大切にしてくださいね。」とおっしゃってくれたのだ。私たちは、自分達の関係に対する評価はされたことがほぼなく、ゼミ生の立場が中途半端であることに悩んでいたが、第三者目線で見ると、ゼミ生が先生でもあり友達でもある姿を肯定してもらえたことは非常に嬉しかった。

ポジショナリティが「中途半端」であることを極めることは、絶えず悩み、考え続けることを要請し、継続することは困難だ。しかし、それを可能にしてくれたのは、何よりも生徒が、慕い、求めてくれたことや、一緒に中途半端でいてくれたゼミ生や、支えてくれた先生、abc ジャパンさんなど周りの人に恵まれたからであろう。本当に感謝である。

4年 担当：三田の家

氏名： 津谷瑛里

フレンズプロジェクトという1年間の活動を通して私は、鶴見夜教室とふれあい館、三田の家で人々に出会ってきた。そこで触れ合った人の顔を思い浮かべると、私はそのひとりひとりから気づきと学びのきっかけをもらったのだと深く実感する。その中で、鶴見・川崎エリアに暮らす外国につながる子どもたちとの出会いを通じて学んだことと、三田の家を舞台とした「対話」の実践を通して生まれた気づきが、どうつながっていったのかを考えようと思う。

外国につながる子どもたちの学習サポートの実践では、彼らと触れ合うことの楽しさと、彼らのまだ見ぬ将来の不確かさが常に自分の中に混在していた。自分のしていることとできること、自分の日常と彼らが直面している様々な悩みのギャップがあまりにも大きくて、いつも「自分はこれでいいのか」と自分に問い続けていた。それでも、どんなに視野を大きく持って実践を続けていても、その実践は一步一步進むしかない。いくら部屋が散らかっていても、目の前に落ちている紙くず一枚を拾うことからしか片付けることはできないのと同じように、私たちは自分ができることをひとつひとつ見つけ、実践していくことでしか前には進めないのだと、強く実感した。言葉にしてしまえば、あたりまえのありふれたことのように聞こえるが、自分の感覚にその経験が刻み込まれたことは、必ず次に前に進む原動力になる。日本語での会話、家族とのコミュニケーション、受験という避けられない進路選びなど、外国につながる子どもたちが不安になる現実があまりにも多い暮らしの中で、彼らと学び合えるフレンズプロジェクトの実践を通して何ができるか、考え続ける自分を後押しする支えとなる気づきを得られたと思う。

さらに、三田の家の実践を通して「実際にやってみること」の難しさと同時にその可能性の大きさを実感できたのは、学習サポート教室で身にしみた「一步一步の大切さ」を更に確信的なものにしてくれた。当日の予定をたてていた運営側の想定を超えて、参加者の間で学び合いがあり、予期せぬ気づきが生まれていく時間。その過程の中にいると、直接的な言葉のやりとりがあってもなくても、自分の中に新しい学びが生まれているのに気がつく。自分以外の誰かが気づきを得ている過程を見ることで、自分も気づきを得るのである。私自身そのような学びがとても多かったのだが、その振る舞いが受け入れられたのは、三田の家と、そこに在るゼミ生とがつくる空気が違和感無く流れていたからだと思う。毎回、その時でしか集わなかった人と空気が生み出す「三田の家」という空間だったからこそ、何が生まれるか分からないだけおもしろさと難しさがあったのだ。でも、「もっとこうできたのではないか」と思う難しさともやもやした感覚は、決して悪いものではなく、次に踏み出す思いが変わる。学習サポートと三田の家いずれの実践も、難しかったからこそ前に進めるし、そう思う感覚を忘れずに来年度の活動につなげていきたい。

「対話の空間」を模索した日々」

4年 担当：三田の家

氏名： 保里小百合

三田の家班で活動した日々は、塩原ゼミを通して「対話」を考えるようになった私が初めてその実践を試み、多様な人のアイデアによって彩られてゆくゼミの企画と対峙する日々だった。「対話」することの尊さをゼミに入って発見した私が、秋学期から「対話」の企画を発案することは決して容易ではなかった。振り返れば、個性的で感性豊かなゼミのメンバー、その中でも三田の家班メンバーの皆から常々刺激をもらい、皆のパッションに突き動かされて私も一人のメンバーとして三田の家の毎週火曜日の運営に携わらせてもらう中で私の感性も少しは鮮やかな色を吸収することができたように感じている。

三田の家で行った企画を二つ取り上げて振り返りながら、私自身が感じたことを記したい。一つ目は、オープンゼミで行ったワークショップの「途上国を訪れて物乞いの少女少女に出会ったとき、お金を渡すか否か」という問い。以前マレーシアへのスタディーツアーに参加したとき同様のワークショップを経験したが、やはりこの問いに「正解」はなく、参加者はそれぞれの経験や考えから思い思いの気持ちを語る。このワークショップを通して、たった一つの正解はない問いに対して異なる意見やバックグラウンドを持つ人同士が語り合うことで生まれる気づきの大切さを改めて認識した。現実の社会でも、今私たちが直面する社会問題の多くは実は「正解」がない。だから人々は話し合う。私にとって、「正解」が与えられないからこそ「対話」しようとする姿勢について再考する機会となった。

二つ目は平野智紀さんをお招きして行った「対話型鑑賞会」。この日皆で一緒に芸術鑑賞をした時間は本当に楽しくて、はしゃぎすぎだと笑われてしまったのを覚えている。アートの世界に詳しくない私でも、臆することなく目の前の作品を楽しみ、感じたことを素直に発言できた空気感。他の皆の発言を聞いて、同じ作品を見てもこんなに視点が違うのだととても新鮮な驚きを味わった。そして、鑑賞会後半に飛び入り参加してくれた、日本に来て映画を制作中というニュー YORKER の三人組。鋭い意見を投げ込む彼らの登場で、それまでのゆったりした空気に心地よい緊張感が走った。このときのことを後で振り返って山崎さんが「心地よいズレ」と表現したとき、「対話」の新たな醍醐味を知った。

三田の家の活動を振り返ると、一貫して「対話の空間」を支えてくれるものがある。それは三田の家のキッチンでゼミ生が料理をつくる時間と、それを皆で美味しく頂く時間、そして片づける時間。「食べる」という、有難くも日常に溢れた行動がまさに私たちのエネルギー源で、その行動を三田の家の空間で共にする中で生まれる「対話」の広がりを実感した。それは教室で議論をして外食で話す、という一連の流れでは決して得られなかっただろう感覚だった。

毎週のスカイプ会議では皆がマイペースにお互いの意見を尊重し合って話し合う空気感が確かにあって、いつもほっとすることができた。ワールドカフェやガレッジセールなどいつも新鮮なアイデアでワクワクさせてくれた三田の家班の皆、ゼミ生、そして塩原先生に心から感謝しています。

□■指導教員より■□



小耳に挟んだところでは、「塩原ゼミといえば対話」と一部で言われているそうですね。確かに2011年度のゼミの活動を一言で表せば、「対話と想像力の可能性の探求」ということになるのでしょう。学生のみなさんとともに学んだこの1年間で、「対話」とは「他者」と関わりながらお互いに「変わりあう」勇気をもつことだと考えるようになりました。当たり前なようで、これがとても難しい。ここでいう「他者」とは、それが目の前にいる他人であっても、抽象化された世間一般のことであっても、「自分とは異なる何か」のことであります。親しい家族や友人のなかにも、自分が慣れ親しんだ社会のなかにも「自分とは異なる何か」が存在します。対話とはそういう「自分とは異なる何か」を想像し、直視し、話しかけ、声を聴こうとすることです。けれども僕たちは、知識があればあるほど他人や社会を「知ったつもり」になって他者の存在に気づけなかったり、ペシミズムを言い訳にして他者を直視しなかったり、他者が語りかけてくる声を聴けずにただ自分が「呟いて」ばかりだったりします。対話ではなく「対案」を掲げて、「効率的」に結論を出そうとするせつかちな人々も、世の中にはたくさんいるようです。対案は相手との共通の土台がなければ出せませんから、対案だけをやりとりする議論からはすでに他者は消え去っています。他者との対話は時間がかかり、非効率的なものです。

このゼミに所属するみなさんは、効率的に議論をしようと思えば上手にできる優秀な大学生たちです。にもかかわらず、みなさんはすぐに結論を出して安心してしまいたい衝動を抑えながら、他者たちとの対話に1年間かけて取り組んでくださいました。そんなみなさんの姿勢を、僕は感嘆と尊敬の念をもって見ていました。鶴見や川崎で出会った人々、三田の家で出会った人々、ゼミの仲間たち、そしてみなさんの自己の内面にいる誰か・・・そんな他者たちとの対話は、みなさんにとってどのような意味があったのでしょうか。それはきっと、みなさん自身が一番分かっていることでしょう。僕に言えることは、みなさんがこの1年間で出会った人々、みなさんとの対話に参加した人々の多くは、みなさんの姿勢に感銘を受け、みなさんと出会えたことを喜んでいようだろうということです。みなさんとの対話のなかでほんの少しでも変わることでできた他者たちがいることを、僕は確信しています。

そのいっぽうで、僕がみなさんと取り組んでいることを「塩原ゼミといえば対話」みたいにわかりやすく言葉にしてしまうことへの違和感もあります。確かに対話は2011年度の活動の重要なキーワードでしたが、ではいったい僕たちは何のために他者と対話して、お互いに変わりあおうとするのでしょうか。僕が現時点で抱いている仮説は、「人は一人で生きることはできず、そして人は他者との対話と協働によって他者と共に生きられるように

社会を変革していくことができるはずだ」というものです。他者との対話と協働によって社会を変革する。そのためには何をすればよいのか。そんな「構想力」を鍛えていくことが、来年度のゼミの実践の課題になるような気がしています。

2012年3月

慶應義塾大学法学部准教授

塩原良和

□ ■編集後記— 2012 年度にむけて— ■ □

2009年に始まったFRIENDS PROJECT。3年目を終えて、単発の「プロジェクト」ではなく「継続する」ことの重要性、そして困難さが見えた年でした。

私たち塩原ゼミの学生は大学生活を終えると同時にこのプロジェクトから自然と離れて行くこととなりますが、活動してきたフィールドは今もそこにあります。だからこそ、活動して行く中で、私たちが卒業しても継続していくプロジェクトにしていきたいと思うようになりました。しかし、今年度はそのために必要だった塩原ゼミ内での学年をまたぐ引継ぎが十分ではありませんでした。これは、2012年度に残された課題です。

2012年度も、潮田小学校、ふれあい館のボランティア、中学生向けの鶴見夜教室、三田の家でのワークショップが引き続き行われます。また、高校生になった鶴見夜教室出身の生徒を対象とした外国につながる高校生プロジェクトも新たに行う予定です。

その中で、塩原ゼミの2学年のゼミ生間でいかに経験を繋ぎ、いかに変革していけるかが重要になっていくでしょう。

経験は文章だけでは伝わらないかもしれませんが、3期、4期、そして塩原教授の想いのつまったこの報告書がその一端を担えることを願っています。

2012年度もワークショップや映像上映会の開催を通して活動の報告を行っていく予定です。塩原ゼミのHPや

(http://www.clb.mita.keio.ac.jp/law/shiobara_seminar/index.html)

三田の家でのHP (<http://mita.inter-c.org/>) を通じて情報発信を行っていく予定ですので、ときおりチェックをして頂けると幸いです。

本報告書をご覧下さり、ありがとうございました。

4期 山崎紗也加

FRIENDS PROJECT2011 報告書
編集者：塩原研究会 山崎紗也加
発行者：塩原研究会
発行所：慶應義塾大学 塩原研究会
本報告書についてのお問い合わせは、
下記までよろしくお願い致します。
shiobara4ki@googlegroups.com